
聖夜幻想物語

間宮冬弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜幻想物語

【Nコード】

N5751C

【作者名】

間宮冬弥

【あらすじ】

剣と魔法とサンタクロースが存在する世界で半人前のサンタクロース、セツナが繰り広げる聖夜の初仕事。しかし、それはとても大変で辛いものだった。

第一夜 聖夜の紅い少女

プロローグ

その日の見た景色はとても寒そうな夜だった。窓の隙間から入り込む風で微かに揺れるカーテン。その風が私の身体の体温を奪っていく。

窓から見える空は雪でも降らせそうな厚い雲と同化した闇。その間から覗く双子月がとても綺麗だったのを覚えている。

あの双子月はまるで空に穿^{うが}いた穴のように見えた。あの穴の向こうにはどんな世界があるのだろうか、と私は月を見るたびに思う。

向こう側なんてありはしない。それは私の幻想、空想にすぎない。

もし私に自由があるのならこんな牢獄のような屋敷から飛び出したいのに……でもそれは叶わない願い……叶わない願いなのに願ってしまう……願いは所詮幻想^{ユメ}でしかないのに……

今日はクリスマスだと言うのに私はそんな色気のない事を考えていた。

私の世界はベッド横にあるこの窓から見える世界だけ。ここ二、三年年間、一度も外に出た事はない。それは私の身体が病魔に蝕まれているから。

私に巢食う病魔はどんな医者にも治せないらしい。あとはこの命が尽きるのを待つしかないのかもしれない。

こんな私にサンタさんがプレゼントを持ってきてくれるわけがない。本で読んだことがあるだけの、子供にプレゼントを持ってきてくれる赤い服の人物。空飛ぶソリと空とぶトナカイに乗った顔がヒゲで

見えないほどのおじいちゃん。私が読んだ本にはそう書いていた。

だけど一度も見たことがない……ううん、二年前……たった一度だけ本に書いてある通りのサンタさんが私の元に來たことがあった。でも、私の欲しいプレゼントはくれなかった。それは私がプレゼントを望まなかったから。だって私の欲しいプレゼントは物ではないのだから。

私の欲しいものは……

窓を開けバルコニーに出る。風が身体に染みる……羽織っていたガーディガンを飛ばないうに握り締める。

私は月を見る。幻想^{ユメ}をみるために。『私のココロは幻想^{ユメ}で汚れている……』双子月を見ながら心中でそう思った。

けれど私は幻想^{ユメ}をみる事ができなかった……月を見上げた瞬間。黒い影が私の目の前に落ちてきたのだから。

その影は私の目の前に降り立ち『こんばんは。お嬢さん。今宵は月が綺麗ですね』と声をかけてきた。落ちてきた影は私よりも少し年上の女の人。『黒い』服を着ているが所々破れていて肌が露見している。傷を負っているらしく血らしい液体が流れていた。

サンタさんなのだろうか？ 二年前みたサンタさんとはまったく違っていた。服こそ着ているが帽子がなく黒い綺麗な髪が風になびいていて……かわいい顔なのだがどこか凜々しいその顔つき。その夜の闇と同化しそうな黒瞳はまっすぐに私を捉えていた。

そしてなにより二年前のサンタさんと違っていたのが、右手には不思議な剣が握られていた。剣のことは良く知らないけど斬る部分がゆらゆらと揺らめいていた。

傷だらけのサンタさんはとても痛々しくそして恐ろしく、付着物だらけの顔はとても優しく微笑みそして安らぎに満ちていた。

空っぽの私。

もうすぐ空っぽになる私。

それでも私は生きている。空っぽになる私、いずれ空っぽになる私はそれでも生きているのだろうか？

叶わない幻想を内包しながら……

純白の雪が降る白銀の夜。

それは真紅の服を纏った少女が奏でる幻想の一夜。

◇／クリスマスの夜

「さてと、最後の家はそろそろかな？」

先ほどまで降っていた雪は止み蒼と紅の二つの満月がその丸い姿をすべて現している。月の光は屋根に積もった雪を照らし優しい光を反射していた。

しかし月の光は雪だけを照らしている訳ではなかった。

「ねえ、トナカイさん。この住所って高級住宅じゃないのかな？」

真っ赤な服を身に纏い夜の空を翔けるソリに乗っている十五才くらいの長い黒髪ストレートヘアの少女は住所をメモってある紙を目に通しながらソリを引く目の前のトナカイに尋ねる。

「そう言われても、いま俺ソリ引いてるからな見えないぞ」

そう答えられると少女は「あ、そっか」と言いメモに書いてある住所を読み上げた。

「ああ、その住所は確かに高級住宅の住所だな」

その住所を聞いた目つきの悪いトナカイはそのままソリを引きながら答える。

「なんか、こういう住宅だと別に私たちサンタクロースがプレゼント渡さなくてもこの子の両親がもっといいプレゼントをあげてそう

だね」

「なんだ？ 職務放棄宣言かセツナ？」

「ううん、私もサンタのはしくれ。プレゼントを待っている子供がいれば世界中どこへでも行くわ」

真っ赤な服と真っ赤な帽子を纏う少女はその名の通りサンタクロースだった。そして今日は聖夜前夜のクリスマススイブ。サンタクロースが一年で一番忙しい日である。

「そうだ。それがサンタクロースの本分だからな」

「うん、そうだね。夢を与えるっていいことだね。……到着するまで大変だったけど……」

「はは、そう言うな、どんな所でも行くのがサンタクロースだろ？」

聖夜を翔ける少女はサンタクロース。名はセツナ。彼女は先月正式にサンタクロースになったばかりの新人サンタクロース。

月光に照らさせるその少女は空飛ぶソリに乗り世界中の子供にプレゼントと夢を与え回っているが……しかし彼女は新人なので三件しか振り分けられなかった。

そんな彼女が最後に行く家がセツナの師匠との因縁がある家だとはセツナ自身、夢にも思わなかったのである。後日、セツナは『来年も行くとなると気が滅入る』とつぶやくほどであった。

「トナカイさん。これで最後だから終わったら一緒に本部でケーキ食べませんか？」

ソリの後部座席に置いてある大きな白い袋の中から飲みかけのウーロン茶が入ったビン（プレゼントではなく私物）を取り出し一口飲みながらトナカイに話す。

「おっいいね。で、そのケーキはもちろんイチゴ満載のケーキだろうな？」

「えっ？ あっいや、フルーツケーキですけど……」

「オイオイ、ケーキって言ったらイチゴ満載のイチゴケーキだろう

があ！」

変なこだわりがあるのかトナカイはセツナに怒りセツナは『すいません』となぜか謝罪したのだった。しかし、煮え切らないセツナはトナカイに尋ねてみた

「どうして、そんなにイチゴケーキがいいんですか？」

その質問にトナカイは一言だけ『思いつがあるからだ』と答えた
「思いつですか……もしかして人間のときの……」

「おしゃべりは終わりだ。着いたぞセツナ」

トナカイが空中で止まりセツナがソリから顔を出し確認する。そこには広大な敷地にぽつんと建つ一つの豪邸があった。

「うへえ……広……い　なにここ森？　森の中に家があるの？」
眼下に広がる森のように木々が植えられた敷地を見てセツナはただ、ただ、驚くばかりだった。



「どうですか？　用意はいいですか？　エリス姉さん、クロノ」

大きな屋敷の大きな部屋で何かの支度をしている三姉妹がいる。その一人のメイド服を着たロングヘアの十六才くらい少女は後の二人に尋ねる

「おっけ……で……す」

銃に弾丸を込めながらショートカットにウェーブのかかった見た目は子供っぽく幼児体型で顔も幼顔のメイド服を着た少女は答える
「こっちもオツケイだせ。ミリア姉ちゃん」

拳に装着した籠手から間接をならしショートカットの十五才くらいの少女が答えた

それぞれの返事を聞くとロングヘアの次女であるミリアは一つ頷

き『これよりサンタクロースを迎え撃ちます』と宣言し二人も大きく頷いた。

「ミリア姉ちゃん、作戦は？」

「それはエリス姉さんに任せてあります。エリス姉さん作戦は？」

「あ。考えるの忘れちゃったよ〜あはは〜」

長女にはとても見えない体型のエリスが笑顔で言う強烈な一言で凍りつく空気。時間が止まるような威力の一言。ミリアとクロノの顔が真っ白い灰のようになる。当の長女エリスは何事もなかったように『作戦に頼っちゃダメだよ〜二人とも』と二人に言う。

「エリス姉ちゃん！ 作戦がなくてあの百戦錬磨のサンタクロースに勝てるの！？」

怒号を含んだ声でエリスに叫ぶ。

「大丈夫、大丈夫。こっちは三人で向こうは一人だし〜」

その怒りもひょうひょうとした笑顔で切り抜けエリスはクロノを言いくるめた。

「じゃあ二年前そのサンタクロースに勝てなかったのはどうして？」
最後のミリアのツツコミにエリスはこう答えた。

「そんなの決まってるじゃん。作戦を立てたってあのサンタさんはことごとく私の作戦の裏を行くんだもん。せっかく立てた作戦を立て直すだけで戦闘が終わっちゃったし。今回だってうまくいくとは限らないし。なら最初から作戦なんてないほうがいい。っていうか『作戦なし』が作戦みたいなもんだよ」

「で、でも！」

クロノが納得できないといった感じでエリスに投げかけるが『わかりました』とミリアが言葉を発した。

「ミリア姉ちゃん？」

「いまから考えても間に合いません。それに崩される作戦なら始めからないほうがいいですわ。今回は作戦なしで三人の持ち味を生かして自由に戦いましょう」

「うん、それがいいね。ミリアちゃんは接近戦でクロノちゃんが肉弾戦、わたしが遠距離戦。それぞれがしっかりと役割を理解して戦えば勝機も見えてくるよ」

しぶしぶ納得したように『わかった』と答えるクロノ。それを確認したミリアはエリス方を向き『ミリア姉さんお願いします』と言いいミリアは一つ頷き、テーブルに置いてあった鈍く光る石を手にとった。



「よし、じゃあ、最後の家に言ってくるね」

セツナは白い大きな袋の中から手のひらくらいの小さな白いを取り出しベルトに縛り付ける。

「ちょっと待てセツナ、剣を持っていけ」

「えーっ 別にこの家で戦闘は起こりそうもないですよ？」

呼び止めたトナカイにそういうとトナカイは『いいから持っていけ』と半ば強制的に剣の携帯をうながす。

「本当に持っていないとダメですか？」

「ダメだ。お前が戦闘がないと思ってても向こうはやる気マンマンの可能性があるだろ？ その時武器がなければ戦えない。それにこの家はクラインが一番最後に行けって言った家だろ？ あの男が言った家だ。なんかあるだろう」

「うーん……そういえば師匠がそんなこと言ってたな」

セツナは腕を組みうーん、うーんと唸り徐々に思い出していった。「いいから持って行けって。新人とはいえお前はサンタクロースなんだ。どんな戦場だろうが局地的状況だろうがそこにプレゼントを待っている子供がいれば必ず行く。それがサンタってもんだ」

トナカイにサンタクロースとしての使命を悟られセツナ力強く『

わかりました』と頷くと進行方向から見て左のソリの左外壁を握り『外壁』引き上げる。

上部が引きあがりスライドし音を立て剣の柄が突き出てくる。正確には剣ではなく刀と呼ばれる倭国製の片刃の剣で刀身の部分の幅が普通の刀より広く鰐つばがない。柄と刀身が一直線になっている大きな直刀だった。

刀を掴み引き出しベルトに装着してあるソードホルダーに刀を納める。そして、眼下に広がる敷地とその敷地にある家を一通り見通す。

見渡し終わると刀を取り出した反対側の外壁を先ほどと同じように取っ手を持ち引き上げる。さっきと同じガシャンと音を立ててそこから現れたのは刀ではなく長方形の板で先端と終端が丸くなっているただ、それだけのボードだったがセツナはそれを取り出し右足の甲にベルトをハメ『行ってきます』と言い空飛ぶソリから飛び降りた。

「気をつけろよ」

そんなトナカイの気遣いの言葉も届かずセツナは蒼と紅の二つの満月が綺麗な夜の空をまるで雪の上を滑走するように滑るように降りていった。

近づいていく豪邸に徐々にスピードを落とし屋敷の大きな扉の前で着地した。

ザワッ……

風が変わる。そんな違和感を感じたセツナは体全体で後ろ、左右、空を大きく見渡しそして、『これって……』と呟いた。

「トナカイさん！」

次の瞬間、首元に下げている十字架のペンダントに叫ぶ。

「わかってる！ こっちも確認した」

トナカイは耳に着けているイヤリングに言う。このペンダントと

イヤリングは小型通信機も兼ねていてお互い遠くにいても話す事ができる。

「オレの真上が霧にかかったように先が見えない……ってことは《ずらされた》？……隔離結界だな……」

「違います……隔離結界みたいな生易しいものじゃありません……この嫌な感じ……不快感……嫌悪感……体にまとわりつく嫌な空気……不愉快になる……この感じ……」

体に風を受けて率直のいまの感じを口にだす。その言葉全てがこの空間への否定の言葉だった。

「セツナ……？」

顔は見えないが息詰まる。張り詰めた声がペンダントを通じて伝わってくる。それはセツナの緊張と不安だった。

「これは虚無の結界です……この結界に侵入した者の存在や因果といったそのものを一時的に切り離される……ここから生きて帰ればそれらは元通りだけ……死んだら存在と因果は完全に消され灰になる……最悪な結界……でも、大丈夫です。トナカイさんには指一本触れさせませんから。そこでじっとしててください」

言葉の最後は微笑み明るくトナカイに言う。



「オッケー。結界張り終わったよ」

光る石に魔力を籠め終えエリスは言う。

「ご苦労様です。エリス姉さん」

「じゃあ、そろそろ行こうぜ」

クロノの言葉をきっかけに三人はドアを開け部屋から出る。そして、階段を降り玄関のロビーでその足を止めた。

◇

「じゃあ、ちゃっちゃつとこの結界を張った人を倒して結界を解除して来ますね」

「気をつけろよ」

「わかってますよ。その為に沙羅双樹を持たせたんでしょ」

セツナは倭国製の大きな直刀、銘は《沙羅双樹》。柄を強く握り片方の手で屋敷の扉に手をかけそのまま扉を押す。

錆びた金鳴り音が響き扉が開く。セツナは少し開いた扉から顔を覗かし邸内を目を動かし確認する。屋敷内は壁にランプ取りつけあるが全てのランプに火が点いておらず邸内は薄暗く目が慣れないと辺りがはっきりみえないくらいに明るさだった。

中を確認したセツナはゆっくりと邸内に入る。もちろん辺りへの目配りも忘れていない。あらゆる状況に対応できるように入る前に握った沙羅双樹の柄をいっときも離してはいなかった。

「待っていましたわ。サンタクロース」

この声をきっかけに点灯していないランプに一齐に火が入る。それまで薄暗かった邸内が明るくなり間取りがはっきりわかる。

三人いるメイドの一人が声の主。邸内の真ん中にある階段の前に立ちセツナを睨みつけていた。

「あれゝ 今年はミリアちゃんと同じくらいの年の女の子が来てるゝ」

「なあ、去年まで来ていたおじいちゃんはどうしたんだ？」

銃を持ったウェーブヘアと手に籠手を装着したショートカットのメイドがセツナに尋ねる。

「……」

「警戒してるようですね。ですが、去年のサンタクロースは私たちの質問にはちゃんと答えていましたわよ」

セツナは無言でメイド三人を鋭い目つきで見る。その視線をセツナと同じ倭国製の刀を携えたロングヘアのメイドは目をそらさずに受け止めている。

「……………師匠が？」

その一言を言うと刀を持ったメイドはまゆをひそめる。

「師匠なんですね。あの人は」

「まあね。でも、これ以上はあなたには関係ないでしょう。それより早くこのふざけた結界を解いてくれませんか？　このお家のお子さんにプレゼントを渡したいんですけど」

「それはできない頼みですわ。もし、この結界から出たければお嬢様にプレゼントを渡すことを諦めなさい」

その言葉でセツナの顔が剣幕という怒りで染まる。

「それはできません！　プレゼントを渡す事が私たちサンタクロースの使命です！　それを渡すな、というのはどういうことですか！？」

刀をもったメイドミリアにセツナは咆哮する。

「……あなたは、その使命を全うしたいのですか？」

「もちろんです！」

「ならば！　私たちを倒していきなさい！」

「！」

ミリアは鞘から刀を抜きセツナへと疾走する。

響く金属音、それは刀が鏖競り合う音。セツナは沙羅双樹を抜きミリアの斬撃を防ぐ。

「ミリアちゃん！」

後ろからエリスの声。そして両の手に持つ二挺拳銃から数発の銃声が響きミリアがジャンプする。その直後、放たれた鉛の弾丸がセツナを襲う。

「くっ！」

沙羅双樹の水が流れるような太刀筋で上下左右になびかせ銃弾を沙羅双樹の刀身ですべて叩き落とす。しかし、メイドたちの攻撃はそれでは終わらなかった。

「はあああああっ！」

ジャンプしていたミリアが刀を振り下ろしながら下降しセツナを急襲する。それに気づいたセツナは上空からの強襲をバックステップで紙一重でかわす。

「ちっ！」

「まだまだ！」

バックステップでミリアと距離を取ったセツナにクロノが駆け追撃をかける。

「でりやあああああああああ！」

風を切り裂くようなすごい拳がセツナを襲う。

「やばっ！」

セツナはとっさに沙羅双樹の刀腹とうぶくを盾にしクロノの拳撃を防ぐ。しかし、防がれた瞬間、クロノはすばやく反応し体勢を低くする。

「ボディが甘いぜ！」

「しまっ……！」

沙羅双樹の間を縫いセツナの腹部に強烈な蹴りがまともに入る。セツナは後転、横転を繰り返しながら吹っ飛び、屋敷の柱に背中からぶつかり止る。

「いっつ……！」

沙羅双樹を杖代わりにしセツナはゆっくりと立ち上がり食らったダメージを体を動かし確認する。だが、その刹那、閃く太刀筋がセツナを襲う。

再びまみえる刀と刀。鏢迫り合いの中ミリアは顔と刀をぐいっとセツナに近づける。

「諦めて家に帰りなさい」

「なんで、プレゼントをあげちゃいけないの？　子供が喜ぶ顔が見たくないの？　しかもあなたメイドでしょ？　この家の主に仕えているんでしょ？　ならこの家の子供が喜ぶんだからいいんじゃない？」

「違います。私たちはこの家の主に仕えているわけではありません。私たちが仕えているのはお嬢さまだけです！」

「なら……なら、そのお嬢さまにプレゼントをあげればお嬢さまが喜ぶでしょ！」

「聖夜にプレゼントをあげるのがサンタクロースだけだと思うな！　お嬢さまの……プレゼントを渡していいのは私たちだけだ！」

気合の咆哮と共に罅迫り合いのまま刀をセツナごと振り切る、セツナは柱に叩きつけられその強烈な衝撃に柱にヒビがはいった。それほどもでに凄まじい威力の一撃だった。

「く……わかんないよ……なんでプレゼントをあげちゃいけないの？……なら、どうして自分たちでプレゼントしないの？」

先ほどと同じように沙羅双樹を支えにし立ち上がる。しかし、息が上がり肩が上下して乱れた呼吸をしていた。

「答える必要はありません……」

「ずいぶん悲しい顔するんですね……」

「えっ……」

聞こえる銃声。聞き取ったミリアは横へ飛びのきその場を離れ残されたセツナは沙羅双樹を構える。

弾跡を見切り水流のごとくの流れる軌跡で銃弾をすべて叩き落す。

「これ、返します！」

叩き落とした両脇の二つの弾を沙羅双樹で下から上に降り、さらに振り上げた沙羅双樹を上から下へと振り同時に打ち弾を打ち出しエリスに返す。

「ひやややや……」

弾が返ってくるなど夢にも思わなかったエリスは何も出来ずにた

だ立ち尽くし目をつぶってしまった。

しかし、一瞬でエリスの目の前に影が落ちる。エリスの身体が闇に染まる。そして閃光の一閃。エリスの目の前に現れた影が放った横ひと振りでセツナが返した弾を真っ二つにした。

「ミ、ミリアちゃん……」

落ちた影はミリアだった。刀の切っ先をセツナに向け口を開く。

「さすがは百戦錬磨であり一騎当千のサンタクロースですね。ですが、本気で戦っているの？ 今の攻撃……でいいのかしら？ あなたエリス姉さんに当てる気はあったのかしら？」

「訊かせて。どうしてプレゼントをあげてはいけないの？」

「先ほども言ったはずですが？」

「訊かせて」

「……私たちがお嬢さまにプレゼントをあげるのが道理です。赤の他人にプレゼントされる覚えも義理ありません」

「確かに義理もないけど、わたしはこれでもサンタクロースです。このままなにもあげずにおめおめと帰るわけには行きません！」

「ミリアちゃん！ ごめん！」

話の腰を折るように後ろにいたエリスがミリアの肩を踏み台にして飛び上がる。

「この距離なら、はずさない！」

セツナの真上まできたエリスは体を垂直に銃口をセツナに向ける。セツナは沙羅双樹を構えるよりも早く銃口から弾丸が飛び出る。

真上から放たれた弾丸は真っ直ぐにセツナに落ちてくる。沙羅双樹を構えるのを中断しセツナは体を大きく右にずらす。セツナにいた位置に弾丸が突き刺さると同時にエリスが着地する。

間髪入れずに振り返りセツナに銃口を向け乱射する。セツナは沙羅双樹を風のように軽やかに舞わせ小さい金属音を奏で弾を落とす。それはまるで舞を舞うように美しくまったく無駄のない動きだった。

この時エリスは思う『この人に銃は通じないと』

「うおりやあああああああ！」

傍観を決めていたクロノは翔けセツナに向かう。今もなお銃弾を沙羅双樹の舞いで落としているセツナは横目でそれを確認する。同時にエリスの視界にもクロノが入り銃射を中断した。

「でりやあああああああ！」

クロノの腰と気合の入った拳が襲い掛かる。銃撃が中断されたと気づいたセツナは冷静にクロノの攻撃を体を半回転させ半身になりかわし勢い余ったクロノをすれ違いさま背中から肘打ちをし突き飛ばす。

「ちっ！」

クロノが舌打ちをする。エリスは中断していた攻撃を再開し銃を乱射する。しかし、セツナは沙羅双樹を舞わせ銃弾をことごとくはたき落とす。その見事な太刀舞いは優雅で見るものの心を奪うかのような舞いだった。

「弾切れ……あのサンタには……『実弾』じゃダメなの」

銃の引き金を引いてもカチカチと音が漏れるばかり。弾がでないとわかると、うつむき銃をダランと下ろす。

「クロノ！ サンタに挟撃きょうげきをかけます！ いけますね！」

「おうよ！」

エリスをカバーするかのように二人がセツナに向かう。そしてミリアが最初に辿り着き上段から刀を振る。

刀と刀がぶつかり金属音が鳴り響き残響が残る。何度も何度もお互いに刀をまじわせる。その度に金属音が鳴り響きく。お互いかわすことなく刀をぶつけている。いや、かわすことができない。それ

だけするどくかわすスキのない攻撃だったのだ。

「後ろがガラ空きだせ！」

セツナの真後ろからクロノが急襲をかける。セツナは一瞬だけ後ろを向き、またすぐミリアの方へと視線を戻す。

そして、ミリアの刀をなんとか、かち上げ一瞬だけミリアの攻撃から解放される。その瞬間を見逃さなかったセツナは、沙羅双樹の刀背の手で引き上げる。ガシャンという小さな音と共に刀背の部分が引き上げられる。

二つの金属音と鈍い音が同時に鳴る。ミリアの剣撃を右の『沙羅双樹』で、クロノの蹴りを左の『沙羅双樹』の刀腹で受ける。

「なっ……」

クロノが驚愕している。今、セツナに両手には二刀の沙羅双樹があった。

「そんな、刀の中から刀が……」

セツナは二人が一驚しているスキを逃さず半回転し二人同時に攻撃を仕掛ける。いち早く気づいたミリアはセツナの剣撃を刀で受け流す。それと同時にクロノも反応し腕にはめた籠手でセツナの剣撃を受け止めていた。

セツナの刀を下に受け流したミリアはそのまま刀を振り上げセツナを襲うがセツナはもう回転しクロノの元にあった沙羅双樹で受け止め受け流されたもう一刀を下からクロノへと斬り込む。クロノは剣撃を腕をクロスさせ防ぐ。

「くそっ！ 当らねえ！」

クロノはいらだちを声に出しながら蹴りや拳を繰り出すしかし、その全てがセツナの沙羅双樹によって防がれ、弾かれる。

同じくミリアもクロノと同じように絶え間なく剣撃を繰り出しているがセツナの沙羅双樹によって全て弾かれる。

（この攻撃をすべて凌いでいる……）

ミリアの心中を知らずにセツナは二刀の沙羅双樹を巧みに振り二人のメイドの攻撃をすべて弾き、防ぐ。変わる変わる変化する攻撃を、上下左右に時にはジャンプでかわし、時には空中でも沙羅双樹を振りかわしていく。

（攻撃にスキがない……こっちが反撃できない……）

一見、全ての攻撃を防いでいるようだが有利のようだがセツナの心は焦っていた。それは、二人の攻撃を防ぐだけで精一杯だった。

このまま、防ぎつづければ体力が消耗しいずれは力尽きてしまう。しかし、それは攻撃をかけている二人のメイドも同じ事なのだがそれを待つほどこっちの体力が持たない。

「クロノ！ このままじゃちがありません、いったん退きます！」
ミリアはバックステップでセツナから距離を取る。同時にクロノも同じく退く。

（退いた……?!）

二人が退いたと同時に乱響する銃声が響く。

しかし、鳴り響くは小さな金属音。二刀の風のような軽やかな太刀舞いですべての弾が音を奏で地面へ落ちる。セツナの舞うような姿は二刀の沙羅双樹でさらに美しさが増していた。

（やっぱり、ダメ…… だったら！）

エリスは引き金を引くのを止め、セツナに向かい口を開く。

「サンタさんには実弾が通じないんですね」

エリスはとてもさわやかで眩しい笑顔をセツナに贈る。

「とてもいい笑顔ですね」

「でしょ？ 笑顔には自信あるんだ」

セツナの一言にエリスはそのかわいい笑顔を崩さずに話を続ける。

「銃弾が通じないサンタさんには攻撃方法を変えないといけません」

「そうですか。では、変えてもらって結構ですよ」

「でも、その前に少しお話をしましょうよ」

「エリス姉ちゃん！ 話なんてしてる場合はなんて」

「クロノちゃん、少し黙っててくれる」

横槍で言葉を割り込ませたクロノに笑顔で返す。その笑顔はそれ以上の発言を許さない威嚇であり威圧。その笑顔に気圧されたクロノはそれ以上なにも喋らなかつた。

ミリアも姉のエリスの行動を見守る。

「エリス姉ちゃん……怒ってるのかな？」

ミリアに近づき耳打ちをしてひそひそ話を始める。

「ええ、顔は笑顔ですけど腹のうちは煮え躁り返ってるでしょう」「うひゃ~~~~あんな怒った姉ちゃん久しぶりに見た」

「そうですね。わたしもあの時以来久しぶりに見ます」

そんなひそひそ話をしている二人を尻目にエリスは話を戻した。もちろん笑顔を崩さずに。

「ごめんね。サンタさん話の腰折っちゃって」

「いいえ、別に気にしてません」

「じゃあ、話の続き。サンタさん。お嬢さまへのプレゼントをあきらめてくれない？」

「逆に訊きますけど、どうして諦めて欲しいの？ そのメイドさんが言ったようにお嬢さまのため？」

真顔で速攻で即答で答えるセツナ。そして、一瞬だけミリアを目に留め、同時に疑惑に持っている想いを銃を持ったメイドにぶつける。

「そうです。お嬢さまのプレゼントはわたし達があげるのでサンタさんはプレゼントを置いてさっさと帰ってください」

「……あなたはわたし達サンタクローズがどんな思いで子供たちにプレゼントを渡してるかわかる？」

「わたしはサンタさんじゃないからわかりませんよ？ でもいいじゃないですか。一回くらいあげなくたって」

「一回くらい……あなたはその一回にわたしたちがどれくらいの思いが詰まってると思うてんですか！ あなたには一度かも知らないですけど、わたし達は一年で一度だけの大きな仕事なんです！ それを……それを……たかがメイドなのに……許せない……絶対に」

あなたたち三人を沈めてこの娘さんにプレゼントを渡します！」

エリスの言葉で怒り昂ぶったセツナは沙羅双樹の柄を力強く握る。その怒りは自分のサンタクロースの仕事を否定された事と一年で一回の仕事をたった一回と括くられたこと。その言葉に煮え返るほどの怒りを覚えていた。

「たかが……たかがメイドですって……今の言葉取り消してください！ あなたはわたし達メイドの事をわかっていません！ わたし達はお嬢さまのためなら命を賭けられる！ だから……今の言葉は許さない……絶対に許さない！」

たかがメイド発言に激怒したエリス。二挺銃を構え口を開く。その顔には先ほどの笑顔がなくなめ毛は吊りあがり目は鋭くなっており、口元は軽く齒軋りしていた。

「今の発言を取り消してください」

「いいよ、でも、わたしが負けたらね」

「今の言葉……忘れないでくださいね。サンタさん！」

その言葉をきっかけにエリスは構えていた二挺銃から銃声を轟かせ乱射させる。しかし、何度もなる銃声と同時に小さな金属音と共に銃弾は地へと落ちる

セツナの水のような流れる太刀筋で、弾道を見切り舞うように風のように沙羅双樹を舞わせすべての銃弾を地へと流す。

「なんで！　なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで、何で当らないの！」

息継ぎもせずに一言で言い切り銃弾が当たらない、いらだちをあらわにする。

「どうしたんですか？　攻撃方法を変えるんじゃないんですか？」

沙羅双樹で銃弾を落としながら余裕の顔でエリスに尋ねた。エリスは『わかってるよ』と答え引き金を引くのをとね銃を下ろす。

「わかった。やっぱりサンタさんには銃は通じないんですね。全部その剣で防がれちゃうから」

「じゃあ、どうします？　戦線離脱しますか？」

セツナは舞いを止め沙羅双樹を下ろしこのスキに横目で自分の後ろにいる二人のメイドの状況を確認する。

（向こうは攻撃する気ゼロか……それとも、こっちのスキを狙ってる？ ううんそれはないか。なら今この時を狙うはずだし……よっぽどこのメイドさんを信頼してるのかな？）

視線を目の前のメイドに戻し意識を集中させる。

「余裕ね。ミリアちゃんとクロノちゃんを見るなんて」

「そんなことはありませんよ」

「ふーん、どうですかね。まあ、いいや。じゃあ戦闘再開と行きま
すか」

そう宣言するといないやエリスは目をつむり二挺の銃を交差する形で胸元まで持ってくる。セツナは訝しげな顔でその行動を見る。そして、膝を少し曲げ左手に持つ沙羅双樹を正眼に構えこの後に対応できるように意識を集中させる。

「いくよセラフィム、アリエル！ フォームチェンジ エーテルフ
ォーム！」

《了解です。マスター》

セツナの耳に響く誰とでもない声、しかしその女性のような落着
着いた声は確実に、確かにエリスの持つ二挺の銃から。正確には銃
にはめ込まれている光る円盤状の宝石から聞こえていた。

「銃が……喋った……」

《エーテルフォームセットアップオペレーション起動！》

再び聞こえる声、しかし今度の声は先ほどの声とは違う女性の、
荒々しい声だった。

「オツケイ！ アリエル、カートリッジリロード！」

エリスはセラフィムとアリエルに、腕にはめていたレース付きの

リストバンドに仕込んでおいたカートリッジと呼ばれるヴァルファルガー鋳物で出来た軽く薄い四角い黒い板を取り出し、器用に二挺の銃に取り付ける。

直後、銃が光りだしその後、光がはじけ二挺の銃が小さな無数の水の玉のようになり手首の周りをふわふわと漂いだす。それを見ていたセツナはその光景に、そのメイドの神秘的な姿に見とれてしまう。

エリスはすつ、と右手の銃を握り銃口をセツナに向ける。しかしその手には銃は握られていない。何もない中空で銃を握る格好をとっていた。

それに気づき我に返ったセツナは『まさか……これって……やばい!』と、直感的に思う。が、体がそう思う前にすでにエリスに向かい駆け出していた。

これはマズい! これはマズい! これはマズい! これはマズい!
! これはマズい! これはマズい! これはマズい! これはマズい!
ズい!

紅い服をなびかせ何度も何度もその言葉が頭を巡る。言葉が巡る中、エリスは『リアルモードオープン!』と叫び銃の引き金を引く。もちろんそれは引くしぐさである。が、しかし、それはエリスが叫ぶ前のこと。エリスが引き金を引くと同時に手首の回り漂っていた無数の水の玉が一斉に集まり形とっていく。

分子レベルで再構築された銃口から銃弾ではなく代わりに光の弾が射出され疾走するセツナを真っ直ぐに捕らえ、輝きながら、そして天使のような白い羽根を弾道に舞い残しながらセツナへを襲う。セツナは銃弾の軌道見切り沙羅双樹で防御する。

「ムダ……」

エリスは口の端を吊り上げ小さく、とても小さく自分だけしか聞こえないような小さい声で呟く。

「えっ……」

光の弾は沙羅双樹をすり抜けセツナの右肩を貫通した。その瞬間セツナの体勢は崩れ落ちる。

「うわあああああああああああ！」

苦痛に歪む顔から悲鳴がこぼれる。右肩を左手で押さえ傷口を見た。だが、不思議な事にそこはまったくの無傷。傷も見当たらなければ血も出ていない。

ただ、ただ、痛みだけがあった。

「これで、もうその剣で防げないね」

満身の笑みを見せ、銃を構える。手に持つ銃はリボルバー方式からリボルバーなしのタイプに変化しており銃身の周りには銃身を中心にし光の輪がゆったりと回りその後部には光の翼が片翼のみ現れていた。二挺、セラフィムとアリエルにそれぞれ片翼ずつ、銃をうごかすたびにその光の翼から白く光る羽根がこぼれおちる。

「クロノ！ 急いで姉さんの元へと向かいます！」

「ああ、巻き添えはごめんだからね！」

傍観を決めていたミリアとクロノはその場から最速のスピードでエリスの元へと向かった。

そして、うずくまるセツナを見、エリスはさらに不適な笑みを浮かべていた。

「痛みだけ……傷もなければ血も出てない……：：：～」

膝をたて肩を押さえながら立ち上がる。たった一発喰らっただけなのに額から汗がながれ肩が上下し息をしている。

「どんどん行くよ！」

銃口から発射される光の弾。白い羽根を舞い散らせながら何発も何発もセツナへと光が襲う。

横へステップし光の弾をかわしさらに何発も乱射される光の弾を

縦横無尽に体と脚を動かしかわしていく。

「すごい身体能力だな……」

「さすがね。数々の戦場をくぐり抜け世界中の子供たちにプレゼントしているだけあって戦い慣れしています」

セツナの動きに素直に心から感心し見惚れているミリアとクロノ。

「サンタさん！　じつとしててよ！」

「ヤダ！　痛いからムリ！」

いらだちを隠せないエリスにセツナは明確にきっちりと却下した。業を煮やしたエリスは攻撃を中断し、右手に持つアリエルを左から右へと流す。

左から右へと動かしたアリエルは光の翼から羽根をこぼしその道筋に六枚の白い光のパネルが現れ残る。

「行くよ。もう、かわせないんだから」

その言葉をスイッチに六枚のパネルがそれぞれ動き出し、セツナの上空の左右に三枚ずつ配置されていく。

「な、なに？　これ……」

見上げ左右を確認するセツナ。そこには六枚のパネルがゆらゆらと浮いる。

「勝負あったかな？」

「そうですね。この攻撃をかわせる人はそうそういないでしょう」

「違うよミリアちゃん、この攻撃をかわせる人なんていない！」

力強くミリアの発言を否定し、セラフィムとアリエルの引き金を引く。二挺の銃から小さな発射音が漏れ銃口から小さな光の弾が発射される。

白い羽根の弾道を残し真っ直ぐに直進する。その光の弾の弾道を眺めセツナは一步も動かなかった。

「どこ狙ってるんですか？」

その二発の光の弾はセツナの横を通り過ぎてんで方向違いに飛んでいく。

「もうすぐわかるよ」

一言を口にしエリスは銃を降ろす。

「!？」

腹部に激痛がはしる。それは腹部を貫いた光の弾。セツナの背後から襲った凶弾だった。腹部から光の羽根がはらりと落ちすつと消え、自分の腹部を貫いた光の弾を信じられないと言った表情と呆然が混じった顔で目で追っていた。

がくつと、崩れ落ちるセツナはうつむけに倒れるがそれでも顔だけはエリスに向ける。

「終わりだよ。サンタさん。これが最後をお願い。お嬢さまにプレゼントをあげるの諦めてくれない？」

「同じ事を言わせないでください……わたしの気持ちは変わらない。絶対にプレゼントは渡します……」

手から離れた沙羅双樹を握り支えにし立ち上がる。

「お腹、大丈夫ですか？」

「そっちがやったんでしょ……」

腹部を押さえる。傷口もなく血も出ていない。皮膚も綺麗な肌色。ただ、痛みだけがそこにある。

「とても痛そうですね？」

「いいからとつとのかかってきてよ……」

落ちていたもう一本の沙羅双樹、名を沙羅双樹・千影ちかげを足で空にすくい上げそのまま空中でキャッチする。

「……後悔しますよ？」

「くどいですよ……」

セツナは今さっきキャッチした沙羅双樹・千影をソードホルダーに収め残ったもう一本の沙羅双樹、セツナが最初から持っていた刀、二本目の沙羅双樹を収めていた刀を、名を沙羅双樹・朔夜さくやを正眼に構える。

エリスもそれに答えるかのようにセラフィムとアリエルを握りセツナに向け銃口を向ける。

（どうする？ どうする？ どうする私？ どうやって躲す？ 防ぐ？）

頭の中での考えもまとまらず、セラフィムから光の弾が発射される。輝く光の弾は弾道に白い羽根を舞い落としセツナの横を通り過ぎる。

セツナもそれを追うように振り返る。

「反射!？」

その言葉通りにパネルに当たった光の弾は勢いそのままに三枚のパネルを反射しセツナに戻ってくる。

返ってきた光の弾をジャンプで躲す。それを見たエリスの口の端が吊りあがったのをミリアは見逃さなかった。

「待っていました！ この時を！」

「しまった！」

銃口を重力で落下するセツナに向ける。そして『この体勢からは躲せない』と気づいたセツナは落下している。

羽根を舞い散らせ襲う光の弾にセツナは手を腕を突き出す。

「はぁ！」

セツナの手の手のひらから中空に光が疾り障壁が展開、セツナの前方に展開する光の障壁が迫る光の弾を防ぎそのまま着地する。

「いっつゝゝ 森羅万象を使ったこと師匠にばれたら絶対に殴られるな……」

自分の手のひらを見ながら呟く。

「あれは…… 《気流術》……？ そう、あなたも使えるのね……」
セツナが展開した障壁を見たミリアが誰とでもなく呟いた。それはとても小さく、それは自分でも聞き取れないくらいとても小さい声だった。

「でも、これであの光の銃弾は森羅万象で防げる事がわかったし。

よしとしますか」

一人納得するセツナ。だが、ここに納得できない一人の少女がいた。

「納得できない！ どうして防ぐの！？ わたしのセラフィムとアリエルの攻撃は物体をすり抜けるのにどうしてすり抜けないの！」

エリスはセラフィムとアリエルを打ちまくる。光のパネルに反射する弾や、直接セツナに向かう弾。セツナは手をかざし自分の正面にくる無数の弾を障壁で防ぐ。

「くっ……！」

さらに、パネルで反射し背後からくる光の弾を横目で確認し、振り返り森羅万象で創った障壁で防ぐ。

「はあああああああああああ！」

「！」

セツナが背後の光の弾を振り返り障壁で防いだ瞬間、銃撃が止まり、ミリアが上空から強襲をかけてセツナを襲う。

金属音が響く。それはミリアの上空からの強襲をセツナは体を半

身に返し左手で持っていた沙羅双樹・朔夜^{さくや}で防御した時に発した音。

「クロノ！ お願いします！」

「あいよ！」

ミリアの張り上げた声にクロノが応え、セツナに向け駆け出す。

「くそ！」

セツナは右手をソードホルダーに収めていた沙羅双樹・千影に手をかけ防御に移行する。

「させない！」

その時セツナの動作を見逃さなかったエリスが再び引き金を引き、光の弾が射出された。白い羽根を弾道に舞い落しながらパネルに反射し寸分の違いもなくまったく同じ箇所放たれた。クロノ、光の弾。両方に目を動かしセツナは一瞬で判断した。

葉どおり辺りは真っ暗だった。セツナは屋敷壁にそって入り口まで走って戻り立てかけて置いたボードを加速したまま手にし、そして放りその上に飛び乗り森へと駆け出す。

「サンタの野郎どこいった？」

窓から飛び出したクロノが当りを見回る。同じように後に二人も窓から飛び出して行く。

地面に残ったのはガラスの破片と窓枠の木材。それ以外は何も残っていないかった。

「見て、二人とも」

下を向いていたエリスが二人を促す。ミリアとクロノはそれに習うように地面を見た。

「足あと……」

ミリアが言うとおりに土にははっきりと小さな足跡が残されており、その足跡は玄関の方へを続いていた。

三人はそれを辿る。しかし、足跡は森の方向へと向かっていたが途中で途切れてしまった。

「スカイボードで追跡しよう」

そう、ミリアが提案した。



「真っ暗……道なりじゃなかったら木にぶつかってるよね」

セツナは車輪のない宙に浮くボードで舗装された道を走る。同じ風景、変化のない景色が続く。その中でセツナはキョロキョロと目を走らせ何かを探していた。

「どうする？ このまま逃げ切れるわけじゃない」

セツナはこれからの対応を考えていると右前方に凄まじい光を放

つ巨大な樹が見えた。

「なに……あの光る樹……」

セツナが不信感を抱いたその時、巨大な樹から光が消えた。

「クロノ、月光樹アルテミリスを思いっきり叩きなさい」

「わーってるって」

ボードにT字型のステックハンドルが付いたスカイボードに乗り地を走る。

時はセツナが光る樹、月光樹アルテミリスを発見したと同時刻。

ミリア、クロノがそこにいた。

クロノは加速し月光樹アルテミリスに近づく。

「でりやあああああああああああああああ！」

さらに加速させ月光樹アルテミリスにすれ違いさまに強烈な蹴りを繰り出す。強烈な一撃で月光樹が揺れ光が弾ける。

弾けた小さな光は意思を持ったように縦横無尽に動き回る。

数千、数万の小さな光は瞬く間に森全体に広がっていく。

「光が広がっていく……?」

セツナは光る樹から光が消えたのを目撃した頃に戻る。

小さな光はそのひとつ、ひとつがランプ程の光を放ち森を包み込んでいく。

「これって……魔光虫? 綺麗……真っ暗だった森が光で満たされていくみたい……」

光が広がる森の光景にセツナはすっかり見惚れ追跡者の存在を忘れていた。

「赤い服に二振りの刀……見つけた! サンタクロース!」

上空からミリアがセツナを発見。スカイボードを急降下させた。

「トナカイさん！ 聞こえますか！？ トナカイさん！」

首にかけた十字架のペンダントに呼びかける。

「聞こえるぞ！ セツナ！」

「よかった。無事でしたね。トナカイさん！ 上空^{うへ}から池かなんかありませんか？ これだけ大きい敷地なんですからあると思うんですけど！」

「池か？ ちょっと待て今確認する」

「わかりました！ なるべく急いでください！」

通信を切断したその時、『サンタクロース！』と、耳に轟く。

「えっ！？」

セツナは上空を見上げるとミリアが空を飛ぶボードに乗って刀を振り急襲をかけてきていた。

キーン！

「くっ！」

刀と刀がぶつかり金属音が響き刀が弾かれる。

「逃げるとは往生際が悪ですわよ！」

「誰も逃げてないわよ！」

上空と地上で刀と刀が激しくぶつかり合い金属音のはじける。その刀と刀のぶつかる音に驚き魔光虫も驚き退ける。

やがて空で攻撃を仕掛けていたミリアのスカイボードが重力に引かれセツナの真後ろで降りる。

そしてセツナはボードごと回転させ真後ろへと、ミリアの方へと対峙する。その間も止まることなく二人のボードは宙を疾走^{はし}り動きを止めていない。セツナは後ろ向きで前方を疾走^{はし}り、ミリアも疾走^{はし}る。

（あれはウイングボード……加速力ならあっちが上……どうする……）

（あれって、スカイボードだよね……加速力ならこっちが上だけど向こうは短時間だけど空を飛べる……どうしよう……）

お互いに見合い、動かない。しかし、景色は流れていく。

（ここはこのまま振り切る！）

小さくジャンプし身体ごとボードを回転させ前方を向きスピードを上げる。

「逃がしません！」

ミリアは抜き身のままの刀を腰に回す。

「はああああああ！」

気合と共に居合い抜きのように刀を腰から上に打ち上げた。

「えっ！！」

土煙を巻き上げミリアが気を練り上げた気功波を放ちセツナを襲う。

「この技は……森羅万象！？」

左手を後ろに突き出し気の障壁を張る。ミリアの放った衝撃波がセツナの発生させた障壁にぶつかり光がはじけお互いの気が消滅する。

「お前だけじゃないんだぜ！ 気流術を使えるのは！」

「！！」

セツナの脇の茂みから突然現れたスカイボードに乗ったクロノに驚き一瞬、防御が遅れクロノの拳の一撃がまともにヒットする。

「くっ！」

空高く打つ上げられたセツナは木とすれ違いざまに沙羅双樹を刺し柄を中心に一回転し、そして刀背に器用に立つ。

「あ……」

セツナの眼が木の根元で留まる。そこにはミリアが細く微笑みセツナを見上っていた。その瞬間、木の根元に閃光が走る。

ズズッ……ゴゴゴゴゴゴゴゴ

木がナナメに斬られ倒れる。

「ムチャクチャだよ！」

セツナはナナメになった木に移動し沙羅双樹を抜き倒れる木の先端に向かい走り出す。

後方からの光る弾がセツナの頬をかすめた。

「光の弾?! 後ろ！」

「逃がさないんだから！」

振り返ると二挺拳銃を構えスカイボードに搭乗したエリスだった。
「くっ! ああ光の弾はメンドい!」

雨のように射出される光の弾をセツナは狭い足場で舞いを舞うように躲し、直撃する弾だけを障壁で防ぐ。

しかし、その間にも木が倒れている。セツナの予定では先端から他の木に飛び移るはずだったが木の速度と地面の距離を目測し『やばい……もう間に合わない』と辿り着く前に木が地面に激突すると確信し木からその場から飛び降りる。

「まだまだ!」

クロノがスカイボードで落下中のセツナに追撃をかけるために急上昇を開始していた。

「強引……」

小さく少し怒気を含んだ呟をこぼしセツナは沙羅双樹を両手で握り後ろに持っていく。

「上等!」

セツナの一連の行動を見たクロノは拳を引きお互い臨戦体勢に入った。

「「はああああああああああああつ!」」

二人の咆哮が森に響き魔光虫が驚き飛び退ける。

ガキイン！

瞬光がはじけひととき大きな金属音が鳴り響く。

クロノは上空。セツナは空中でくるっと身体を一回転させ足から地上へと着地し、そのまま走り出していた。

その後をミリアがスカイボードで追いかけるが大きな轟音と葉が擦れる音とともに倒れてきた木がセツナとミリアの間に倒れ込み追跡を妨げる。

「くっ！ サンタクロース！」

ミリアは声を漏らし眼前の自分で斬った大きな木を睨みつけていた。

「クロノちゃん！ 大丈夫？ ケガない？」

エリスはスカイボードで近づきクロノに声をかけた。

「ああ、大丈夫。あのサンタ……最初から攻撃する気なんてなかったからな……」

しかし、クロノはエリスには目を合わせず言った。その右手の拳は力強く握り締められ震えていた。

「あの野郎……あの幅広の剣腹で拳を防御しやがった……エリス姉ちゃん！ 追いかけてよう！」

ミリア合流したエリスとクロノはスカイボードで木を飛び越えセツナの後を追いかけていった。

◇

「危なかったあゝあと少し走るの遅れてたら木に潰されてたよ……」

走りながら顔だけ後ろを向く。そこにはさっきまで自分がいた場所が倒れている。

「でも、これですこしあのメイド達を少しは足止めできるかな」
少しだけ安心した顔をし視線を前方に戻し今度は周りをキョロキョロと見渡し始める。

「さてと、とりあえずわたしのボードを回収したいな」

走りながらセツナは行方不明になったウイングボードを探す。

疾走する事数分、脇の茂みに埋もれ半分だけ姿を表している見覚えのある白い板が視界に入る。

「あった！」

「見つけたぜ！ サンタクロース！」

セツナがウイングボードを発見したと同時に空から後を追いかけてきたメイド三人娘にも見つかる。

クロノの声が耳に届いた瞬間、はじける様に加速しボードに一直線に向かう。

そして、減速しないままボードを前方に蹴り上げセツナも跳躍、空中でボードをキャッチし膝を胸まで引き寄せその足元にウイングボードを持って行く。

そしてウイングボードを起動させ空中で瞬間的に加速。加速したまま着地し土煙をあげたまま大地を疾駆する。

「やっぱりウイングボードは疾いね」

エリスが、猛スピードで遠ざかるウイングボードを見て誰に聞こえるわけでもなく呟く。

ぐんぐん差を広げ加速するウイングボード。どんどんと視界から流れ消えていく魔光虫。風を受けなびく風を受けながら目の前に広がる景色を見てセツナは『目的の場所』を見つる。

「あった！ 池！」

目の前に広がるのはとても池とは呼べないほど広大な池。それはもう池ではなく『湖』と呼ぶに相応しい大きさだった。

池を確認したセツナは夜空を見上げる。夜空には蒼と紅の双子月

が綺麗な円形を描いていた。

「よし……双子月は満月……条件は揃ったよ……」

双子月を見上げていた視線を握る沙羅双樹に向けそう述べた。



「どうする？ エリス姉ちゃん、ミリア姉ちゃん。どんどん離されていくよ！」

二人の姉に促すクロノだったがミリアは何も言わずにセツナを目で追いかけてもう一人の姉はこう答えた。

『ここから迎撃する』と。

「な、なに言ってるんだよ！ いくら銃だからってここから直撃^{とて}くわけないだろ」

「届かせる……直撃させてみせる！」
そうクロノにたんかを切りエリスはセラフィムとアリエルに告げる。

「久しぶりに行くよ……セラフィム、アリエル。長距離射撃フォーム《ロンギヌス》スタンバイ！」

《了解しました。長距離射撃フォーム《ロンギヌス》スタンバイを開始します》

《こっちも了解！ いつでもいいぜ》
セラフィムとアリエルが答える。

目をつむりセラフィム、アリエルの二挺銃を胸元でクロスさせるように引き寄せる。スカイボードに乗ってのフォームチェンジにも

怒氣と哀しみを含んだ声を漏らし遅れエリスもセツナの追跡を始めた。

「とりやあああゝ！」

腰に差していた沙羅双樹・千影を気合と共に池に放り投げた。音を立て池に剣が放り込まれる。水面は大きな波紋を何重にも発生させ沈んでいく。

セツナは減速も停止もしないまま池に疾る。背後からはミリアとクロノが迫るがおかまいなしで疾走する。

「おい！ その先は池だぞ！ 止まれ！」

クロノの制止も聞かずにセツナはぐんぐんと加速しどんどん池に近づいていく。そして、セツナの足は池へと踏み出した。

「なんだってええええええええええ！」

その時クロノの顔から目が飛び出るくらいの驚きの顔で驚愕の声が森中に響いた。

その理由は明快だった。池に踏み出したセツナはそのまま池に落ちる事無く走っていたからだ。クロノはスカイボードに足でブレーキをかけ止まる。

しかし、そのすぐ後ろにいたミリアはスカイボードを飛び降りそのままセツナと同じように池に向かい駆け出していた。

「姉ちゃん！ 頼む！」

「わかりました！」

ひとつ返事で承諾しミリアはセツナを追う。池に踏み込む前に石を蹴り池に波紋を作り出した。

「うそおおおおおん！」

今度はセツナが驚きの声を上げた。後ろを見るとミリアがセツナと同じように池に沈むこと無く走っているのだ。

「波紋歩法を使えるのはあなただけではないのですよ！」

波紋の上を疾走しセツナに迫るミリア。同じように波紋の上を疾走するセツナ。

二人は絶えず刀を水面に疾らせ波紋を立てる。それは、この歩法は波紋が立ってないところでは走れないからだ。

パシャ、パシャと水音を奏でる。二つの水切り音。

埒があかないと感じたミリアはセツナが刀で波紋を立てた事を視認したら大きく跳躍。セツナの立てた波紋に着地。

「しまった！ 割り込まれたあ！」

「捉えましたわよ！ サンタクロス！」

振り下ろす刀。振り上げる刀がぶつかり合い音と驚いた魔光虫が弾ける。

甲高く硬い音と水面を疾る音が織り成す激しい協奏曲。池よりも湖に近い池で奏でられるその楽曲は森全体に響き渡る。

水面上で打ち合う二人はまるで刀と刀とで演奏する演奏者のようだった。

池というより湖。その中心で二人は刀を振り演奏する。それは完璧で二人の息はピッタリと合っていて一分の狂いもなかった。

「なんか……綺麗……」

空には蒼と紅の二つの満月。

森を漂う数千の光を放つ魔光虫。

月の光を反射する水面。

月の光で照らさせる水飛沫みずしぶき

水面には絶え間なく広がる波紋。

波紋の上で踊る二人の少女。

まるで夢物語でも見てるような。神秘的であり幻想的でもある光景を見てクロノは言葉を漏らした。

（まだ！？ わたし……耐えられるの?!）

「サンタクロース！ 何を考えているのかわかりませんが、ここでも朽ち果てるまで私と踊りましょう！」

罅迫り合い、弾き、二人は刀を振る。何度も何度もお互いの刀の重なり金属音が鳴り響く。

「アリエル！ ブーストサークル展開！」

《了解！ マスター！》

エリスの声がクロノの耳に入る。声が聞こえた方を向くとエリスが二又の矛に変化したセラフィムとアリエルを構えていた。

二又状の槍に取り付けてある宝玉から声がこぼれる。その声に呼応するかのように湖の中心に六つの円形が中空に描かれていく。

その円形の中心には六芒星が描かれている。

「セラフィム！ エターナルブレイカーのチャージまであと何分！」

《約百五十秒でチャージ完了です》

「十秒前からカウントダウンお願い！」

了解とセラフィムがそう答えるとエリスは槍を構えたままピクリとも動かずまっすぐセツナを睨みつけていた。

波紋上で踊り続ける二人の少女。永遠とも思え舞踊に終わりを告げたのは、セツナの後ろから光の柱が伸びた時だった。その蒼い光を見たセツナは『おそいよ……』と口から小さく漏らし、光の柱を確認した。

「な、なに？」

一瞬、ミリアはその蒼い光の柱に目を奪われる。セツナはその刹那を見逃さなかった。

振り上げた刀がミリアの刀を大きく弾く。刀を弾かれたミリアは大きくバランスを崩し体勢が乱れる。しかし、セツナはその最大の

攻撃のチャンスに攻撃をせずに、大きく後ろに跳んだ。

「くっ！」

ミリアが体勢を立て直すとセツナは蒼い光の柱が伸びる水面に着地していた。

すっ……と右手を水平に伸ばす。それはとても優雅で一寸の乱れもなく吸い込まれるように流れるように動く。

「おいで…… 千影^{ちかげ}」

たった一言の言葉。セツナの言葉はそれで十分だった。水面から強く輝く蒼い光が昇る。それは蒼く輝いている刀。セツナが湖に放り投げた。

沙羅双樹・千影だった。水面からあがった蒼く輝く沙羅双樹・千影を手取る

「いくよ沙羅……カートリッジ装填」

言葉に呼応して沙羅双樹・朔夜の背刀が開く。

開いた朔夜に蒼く光る千影をまるで鞘に収めるように朔夜の背面に入れガシャンと音がはじけ元の一振りの沙羅双樹に元に戻る。そして千影を取り込んだ朔夜は千影と同じ蒼い光が伝染したかのように光り始める。

「形態変化」

セツナが言葉を小さく紡ぐ。沙羅双樹の刀身が強く、強く輝きそしてはじけ消える。柄だけを残し刀身は蒼い光の玉となり、セツナの周りを漂いゆらめく。

「セラフィム！ カウントダウン！」

セツナの様子を伺っていたエリスが突然激しく言葉を漏らす。

《ですが。 まだチャージが完了していません》

「いいから！ アレはマズい！ アレはマズいの！」

《……了解しました。エターナルブレイカー、出力七十パーセントで発射します》

淡々と言葉を発しセラフィムはエターナルブレイカー発射スタンバイに入る。

「オツケイ……アリエル。ブーストサークル展開オツケイ？」

《完了してるぜ！ マスター》

「いい子だね。二人とも」

《では、マスター。カウントダウンを開始しますがよろしいですか？》

「いいよ。カウントして」

《了解。カウントダウン開始します》

セラフィムのカウントダウンが始まり。エリスはギュツと強く、強く二又の槍に変化したセラフィムとアリエルを握った。

「沙羅双樹・桜華^{おうか}開放」

小さく発したその言葉。呼応するかのようにセツナの周りにゆらめいていた蒼い光の玉が一気に刀身のない柄に収束していく。

6、5、4……

「間に合う!？」

カウントダウンを聞き流しながら誰に問うたわけでもなくエリスが発する。もちろん誰も答えない。ただ、ただじっとセツナを睨んでいた。

収束した蒼い光の玉は具現されていく。蒼き光の刃へと。

3、2、1……スタート

「エターナルブレイカー シュート!」

放たれた光の閃光は白い羽根を舞い散らせながらまっすぐにセツナへと向かう。そして、アリエルが設置した魔法陣。ブーストサークルを通るごとに加速が増し、光の閃光が大きくなっていく。光の閃光が強化されていくのが目で見てはつきりとわかった。

「ゆっくりおしゃべりしてる暇ないかな……」

とても残念そうにたったいま具現化した光の刃を見る。

「沙羅。あの光の砲撃は防げる？」

はい、あの光の砲撃は九九・七パーセント魔力で構成されています。現状のアストラルフォームで十分対応可能です■

沙羅双樹・桜華の言葉はセツナの耳には聞こえず文字となりセツナの瞳に直接投影され描かれていく。瞳に投影された言葉を『読み』セツナは「了解」と答えた。

そして、沙羅双樹・桜華を逆手で持ち左手は蒼い光の刃に添える形をとる。

砲撃は最後である六つ目のブーストサークルを通り最大まで強化され大きくセツナを覆いつく対ほどの強大な光が迫る。

迫りくる光の閃光にセツナは動かず沙羅双樹・桜華を構えたまま佇む。足元には蒼い光の玉が浮かび微振動を起こし波紋を立てている。

「永遠に抱かれ眠れ！」

エリスが叫ぶと同時に光の閃光がセツナに直撃した。大きな爆発音が響き轟き光が『割れて』いく。それはセツナの持つ沙羅双樹・桜華を支点に真つ二つに光の砲撃が裂かれていた。

轟音が響き光と水と羽根が舞い散る。

舞い散った水は雨のように降り注ぎ光と羽根は舞い上がる。

「大丈夫……絶対に大丈夫……」

光と羽根が舞い散る着弾点を見、自分に言い聞かせるように口を動かす。

霧の雨と光と羽根が晴れクリアになっていく視界。

そして、エリスの目に映ったのは羅双樹・桜華を逆手に持ち先ほどと同じ構えを取るサンタクロースがそこに存在していた。

「いつかは眠るよ……でも、それは今じゃない」

「悪魔……悪魔め……！」

エリスから言葉が漏れる。その単語は純粹にセツナに向けられたものだった。

「ショックだな……悪魔だなんて……でも悪魔ならわたしも知ってるよ。と、言っても悪魔じゃなくて死神だけだね」

セツナは言うと最後に『あなたが一番厄介だね』と言葉を紡いだ。

では、私が波紋あしはを作ります■

「うん、よろしくね沙羅」

はい、マスター■

告げると沙羅はセツナの足元にある蒼く小振りな小さい光の玉を水面に複数具現させる。その蒼く小さい光の玉は波紋を立てながらまっすぐに分裂しエリスのいる対岸まで続いていた。

「波紋が……エリス姉さん！」

「遅いよ……平衡感覚への干渉開始」

ミリアがエリスに叫ぶ。しかしその言葉は遅かった。叫んだと同時にエリスはセツナの蒼い光の剣に肩から脇腹に向けて袈裟斬りで斬られていた。

「は、迅い……」

「サンタ！　よくもエリス姉ちゃんを！」

ミリアがそう呟くとエリスの隣にいたクロノの怒号が飛びセツナに殴りかかる。

「クロノ！　落ち着きなさい！」

「体力への干渉開始」

ミリアの制止も耳に入らず拳撃を繰り出す。しかしセツナはクロノの真っ直ぐ向かってくる拳撃をすっ、体を翻しと横へかわす。

そして右脇腹から左肩口へと昇り袈裟斬りで斬った。

「クロノ！」

「な、なんだよコレ……なんでこんなに虚脱感があるんだよ……なんでなんだよ……なんでこんなに息が荒いんだよ」

ガクッと膝が落ち地面に四つんばいになる。なりながらもクロノが叫ぶ。

「サンタクロース！　てめえ……なにをやがった……」

掴みかかっていたが身体がゆうことをきかない。まるで五百メートルを全力で走ったような疲労感がクロノを襲っており動けなかった。クロノの問いにセツナは何も答えなかった。ただ、ただ、最後に残った次女のメイドを見つめていた。

（なに……あの剣……姉さんもクロノも斬られたのに血も出ていない……血が出てない……？）

ミリアある事を思い出していた。それはエリスが撃った光の弾がセツナに着弾した時の事だった。

（あの時も血が出てなかった……まさか！　あの剣は……）

確認するようにミリアはエリスとミリアを見る。一人は息を上げ肩が上下しており。一人は立ち上がっているがフラフラを左へ引き寄せられ足がもつれ倒れる。

「！！」

ふと、水面を見た、そこには蒼い小さな光の玉が分裂し浮かびミリアの方へと波紋が広がっていた。

「い、いつのまに波紋が……はっ！」

ミリアは本能的に後ろへ退いていた。そこへセツナの光の一筋が疾^{はし}る。

「いい勘してるね」

「波紋歩法『瞬動』ですか……？」

新しい波紋を立てミリアはセツナの蒼い光の剣を見据える。

「よく知ってますね」

「ええ、わたしもいずれ修得したいと思っていますので。それよりもその剣は姉さんのセラフィムとアリエルと同じですか」

「せらふいむ？　ありえる？」

目を上辺に向けおでこに人差し指をあて考える。

「姉さんが持っていた銃です」

「銃？　ああ、槍になったりするあの銃？　ずいぶん立派な名前があるんですね……ん？　そういえばあの銃しゃべってたけど、ねえ桜華。知り合い？」

『天の亡骸』を巡る戦役で戦った事があるくらいです ■

「そっか」

「……誰と喋っているのですか？　あなたは？」

セツナの一人喋りにミリアは訝しげな顔で尋ねる。

「あっ、すいません。じゃあ。お話しは終わりにして再開と行きましょうか？」

沙羅双樹・桜華を構える。

「そうですね。再開しましょう」

ミリアも刀、名は『輝夜月^{かぐやづき}』を構える。

（わたしの考えが正しければあの光の剣は姉さんと同じ《感覚への直接攻撃》……ならば！）

ミリアは波紋を立てバックステップで後方へを下がる。

「はあっ！」

輝夜月を上下左右に数回薙ぎ三日月状の波動である『気』を連続して打ち出す。

「やっぱりいい勘してるね。あのメイドさん。桜華の特性に気づいてるよ」

ミリアから打ち出された三日月状の気弾を沙羅双樹・桜華ですべて斬り落とす。最後の気弾を打ち落とし時、「あれ?! いない!」と辺りを見渡し視界にミリアがいないことに気づく。

マスター上です ■

沙羅双樹・桜華の投影された文章でセツナは上を向く。

「もらいました! サンタクロース!」

「沙羅、形態変化! マテリアルフォーム!」

いつの間にか跳躍しセツナの真上にいたミリアに対しセツナは沙羅双樹・桜華に言葉を下す。

セツナの言葉に呼応するように沙羅双樹・桜華の光の剣がピキピキと音をたて水が急激に凍りつくような音が響く。

「間に合ええええええええええ!」

セツナは凍りつく光の剣を振り上げ、ミリアは振り下ろす。

硬いガラスを叩いたような晶波音が耳を突き抜ける。

「光が……結晶化した……」

水面に気弾を落とし波紋を立て着地する。

(よかったあゝ間に合ったゝゝゝ)

安堵の表情でセツナは蒼い光が結晶化した沙羅双樹・桜華を見た。

「くっ……えっ? なに……これ……」

ミリアはなにげなく輝夜月かぐやつきに触って気づいた。その異常なほどの凍傷するほど冷却された輝夜月に。

「桜華、あのメイドさん気づいちゃったかな？」

わかりません。ですが警戒を強めています ■

「一つの武器で二つの形態。そして、感覚への直接攻撃……やはり、その剣は姉さんの武器と同じですね？」

「そこまで『わかっていているなら』答える必要ないと思うけど？ 答えたほうが言いですか？ それと桜華は剣じゃなくて刀です」

「それは失礼しました。それと答えなくて結構です。その言葉が答えと受け取りますので」

二人は刀を構え互いを見据える。しかし、ミリアは構えながらも波紋を絶えずに立てる。

「「はああああああ！」」

水面を疾走しお互いの間合いに侵入した直後、刀を振るう。金属音を響かせ刀と刀が鏗りあう。

「か、^{かぐやつき}輝夜月が……凍る！？」

セツナの透き通る蒼い刃の接触している部分からミリアの^{かぐやつき}輝夜月が凍り付いていく。

「答えは聞いておいたほうがよかったんじゃないですか」

「だ、だまりなさい！」

「大方、あなたの予想では『触れたものの温度を下げる』と思ってるんでしょがそれは大きな間違いですよ。桜華はその先をいく」

「うっ……」

「凶星ですか？ でも、そんなことよりいいんですか？ 『いつまでも』わたしの桜華に触れてても？」

セツナのその言葉にミリアは気づき自分の刀に視線を戻した一瞬、

セツナから刀を離し波紋を立てながらバックステップで距離を取る。
（空気が肌を切り裂くように痛い……空気すら凍らす……なるほど『触れたものの温度を下げる』ではなく『触れたものを凍らせる』か……その先をいく……確かに。言い得て妙ね）

「まだ戦いますか？」

「もちろんです。わたしはお嬢さまのためにあなたを倒さなければいけません」

「そんなに、プレゼントを渡されるのがイヤなんですか？」

「お嬢さまの願いを叶えられないサンタクロース達など用はありません」

「なら、わたしはますますお嬢さんに会わないといけないですよ！」
蒼い光を放つ小さな玉が波紋を立てまっすぐに分裂しミリアへと伸びる。

「触れて凍るなら、近づかなければいいだけです！」

ミリアは輝夜月に気を纏わせ横薙ぎに振り三日月上に放つ。セツナは迫り来る三日月上の気に片手を突き出し森羅万象で作り出した障壁でそれをあっさりと防ぐ。

「なっ……」

「どうしたの？ わたしも森羅万象を使えるんだよ。あなたの気術もわたしの森羅万象も根源は同じだから相殺だってできますよ？」

「くっ……！」

殺意に近い感情を醸し出しながらセツナを睨む

「これで、終わりにします！」

セツナは波紋歩法《瞬動》で波紋を神速で疾走する。ミリアは迫り来るセツナを尻目に腰に差していた鞘に輝夜月^{かぐやつき}を収め半身になり片膝を立て腰を浮かす。

（まだ、あと少し……）

全神経と集中力で神速のセツナを目で捉える。疾^{はし}り、沙羅双樹・桜華の切っ先を水面に浸す。切っ先に浸かった水面が直線に凍りつく。

(あと少し……もう少し……)

魔光虫が騒ぎ羽ばたき散っていく。セツナがミリアの間合いに半歩侵入する。

「ここだ！ 瞬空斬！」

ミリアの目が見開き鞘から高速で輝夜月を抜刀する。

「でりゃああああああ！」

セツナは浸していた沙羅双樹・桜華の切っ先を水面ごと斬り上げる。水しぶきが舞い上がりミリアの視界を遮った。

しかし、それはただ遮っただけではなかった。舞い上げられた水しぶきが水面から凍りつきはじめる。

「氷?! くっ！」

ミリアは抜いた輝夜月を制御できず目の前に形成された氷柱をセツナごと横に真っ二つに斬り裂いた。

「獲った！」

二つに斬り裂いた、と思ったのはミリアの思い違いだった。それは砕け折れた氷柱の背後にはセツナの姿はいないからだった。

「状況の把握それと判断力、注意力。それら全てが……遅い！」

斬られた氷柱の影からセツナが氷を跳躍台にして飛び出してきた。
「サン……！」

セツナの握る剣は『斬った物を凍らす氷の剣』ではなく『斬った者の感覚を殺す光の剣』へと戻っていた。

「視力への干渉、開始!!」

振り下ろした光の剣がミリアの袈裟を見事に斬る。

「お見事です……どうして瞬空斬の攻撃範囲がわかったんですか……

……あ、あれ……」

ミリアは眼をこすりだす。

「いや……いやあ……色が……光が……わたしの眼から薄れいく……消えていく……」

眼をこすっては開きこすっては開く。

「眼が……いやあああああああああああああああ！」

ショックでミリアは気を失い背中から湖に崩れそうになる。が、湖に落ちそうになる瞬間にセツナがミリアを受け止める。

「終わった……あとはお嬢さんに『プレゼント』を渡せば任務完了……かな？」

背中にミリアを背負い対岸に向かい水面を歩き出した。

数分後。眼を覚ましたミリアにセツナは視力を失ったのは一時的なもので三時間したら眼が見える事を説明したのだった。

To Be Continued...

第一夜 聖夜の紅い少女（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。間宮冬弥です。さて、今回の作品はサンタクロースを題材にしていますがなんかサントップोकくないですね……ちなみに今回は連載なので続きます。近いうちに二話目を投稿しますので続きが気になるようでしたら、よろしければ読んでみてください。では、これで失礼します。

第二夜 主に仕える者たち（前書き）

前回の簡単なあらすじ。

新人サントクロースセツナは今夜最後の仕事として大きな屋敷のお嬢様にプレゼントを渡すために来たのだが三人のメイドに戦いを挑まれ勝利（？）したのだった

第二夜 主に仕える者たち

「まさか魔光虫の危機察知能力でわたしの剣の間合いを計っていたとは」

「ええ、魔光中はその優れた危機察知能力で神話の時代から生き残った生物ですからね。ミリアさんは気づいていなかったですけどミリアさんの周りだけ魔光虫いなかったんですよ」

「そうだったんですか。わたしもまだまだ修行が足りないですね」

と、いう会話をしながらセツナはミリアに肩を貸しながら二人は浜辺に向かい水面を歩いている。もちろん沙羅双樹・桜華が創り出した波紋で。

「姉ちゃん！」

「ミリアちゃん！」

湖の浜辺に上がった二人を出迎えたのは激闘を繰り広げた二人のメイドだった。

長女にはみえない幼児体系の姉は妹の背中に乗り手を大きく振っていた。。

「おや？ 二人とももう大丈夫なんですね？」

「姉ちゃんを放せ！ サンタ野郎！」

開合一番にミリアがセツナに叫ぶ。

「そんなに怒鳴らなくても放しますけど、その前にまだミリアさん歩ける状態じゃないんで、どちらか肩を貸してもらえるとありがたいんですが」

ミリアは『わたしなら大丈夫です』と言ったがセツナは『ダメです』と返し、エリスとクロノを見て『お願いします』と言った。

「クロノちゃん。わたしは大丈夫だから行ってあげて」

「うん、わかった」

クロノはしゃがみエリスを降ろす。セツナからミリアを抱きとめ

自分の肩にミリアの腕を乗せる。

「大丈夫か？ ミリア姉ちゃん」

「ええ、ありがとうクロノ」

クロノの肩を借りているミリアをエリスはジッと見る。そして、その疑問を訊くために口を開いた。

「ミリアちゃん……もしかして眼が見えないの……」と。

顔を上に向けているのミリアに不穏感を持ったエリスがそう訊いた。ミリアは一つ頷く。エリスの疑問が確信に変わっていき二人とも眼を見開きミリアを見る。

「ホントか？ ……サンタてめえ！」

「クロノ、安心しなさい。眼はじきに元通りになります」

セツナを殺気の籠った鋭い目つきで睨むクロノをミリアはやさしく、諭すように言った。

「本当なの？」

エリスはミリアではなく浜辺に立つサンタクロースに聞いた。

「大丈夫です。わたしの感覚への攻撃は一時的なもので一定時間たてば元に戻ります」

「よかった……」

手を胸に当てなでおろすエリス。

「クロノちゃん、ミリアちゃんをどこかで休ませてあげて」

「お、おう、でも姉ちゃんは？」

「私は、サンタさんともう一度お話するよ」

「……わかった……」

こうして、クロノはミリアを肩で支えながらミリアを木の幹へと座らせるために歩き出した。

「さてと、サンタさん。ひとつ訊きますけど」

ミリアが木の幹に座ったのを確認してエリスが口を開いた。

「なんででしょう？」

「これからお嬢さまにプレゼントを渡しにいくんですか」

「もちろん、でも、まだ戦うんですよね？　あなたとあの無手の使い手がいるし」

「そんなことしませんよ。私たちにもう戦う意思はありません」

「えっ？　そうなんですか？」

意外な答えにセツナは驚きの声を上げる。

「あのままミリアちゃんを放っとけないし。それに、その剣の対応策もないしね」

「そういうエリスはセツナの手握られている蒼い光の剣を見る。それにつられセツナも眼を向ける。」

「その剣は私のセラフィムとアリエルと同じ感覚を直接攻撃する剣ですよ。でも、私と一番違う所は自由に感覚を停止させる事ができ、さらに場所をサンタさんが選択できること。私の場合はバランス感覚で、クロノちゃんは体力でミリアちゃんは視覚。」

それに引き換え私は痛覚だけ。だから、対応策がない。だってサンタさんが【私達の生命活動を停止させる場所】を指定されたら私たちは【死んでしまう】から」

「そんな！　わたしは殺そうなんて思ってますん！」

「心拍への干渉。血液の循環への干渉。脳への酸素補給への干渉。横隔膜への干渉……どれも停止させれば【死へと直結】します。それでも、そう言い切れますか？」

「言い切れます。人は殺しません。だってわたしは子供たちに夢とプレゼントを運ぶサンタクロースだから」

凜とした、誰も殺さない。その決意の表情をエリスに向け言い切った。

「……やはり、サンタさんは強いです……とても」

エリスは顔を伏せ、セツナに聞こえないくらいの小さな呟きを漏らした。

「話は終わりですか？　じゃあ、お嬢さんにプレゼントを渡しに行きますから結界を解いてくれませんか」

「……」

「結界を解いてください」

力強く、その言葉からは滲み出る揺るがない思いは顔から、口調から溢れていた。『必ずプレゼントを渡す』

その決意はエリスでも、少し遠くにいたミリアとクロノにも届いていたようだった。

エリスは胸元に手を引き寄せ印を結ぶ。目をつむり詠唱を紡ぐ。発せられた言葉の奔流は静かに空気に乗り流れる。そして、空に変化が起きる。

空に亀裂が走る。その亀裂は紅い月と蒼い月の二つの月を中心として走り広がっていく。まるで双子月が空にぽっかりと開いた穴のように。

走る亀裂を見上げセツナは思い出す。一年ぶりに再開したあの日の事を。結界を結界としない、張られていた結界を斬り碎いた【結界殺しの魔眼】を内包するあの蒼い眼を持つ少女に。

その少女との最初の出会いは故郷である『倭国』。二度目に出会いはセツナが所属するサンタクロース本部。

前者は共の戦い、後者は血だらけの姿での再開だった。セツナの目を引いたのは重度の傷よりもその瞳だった。初めて会った時は綺麗な黒い瞳だったのだが再開したときの傷だらけ少女の瞳は蒼い瞳だった。

少女は『本部を襲撃した』と言う。なぜそんな事をしたのかは未だにセツナにはわからない。

部屋にかくまい傷の手当てをして、セツナが食べ物を買って戻ってきたらその少女はいなかったのだから。

そして、その少女とはそれっきりになった。蒼い瞳の事も訊けずに少女は去っていった。

蒼い満月を眺めセツナは（あの蒼い月はやっぱりあの人の眼の色に

似てるな」と、心中でつぶやき沙羅双樹を強く握り締めた。
そして、（蒼い眼よりわたしは黒い眼の方が好きだったな……）と、付け加えた。

亀裂が空全体を覆う。線と線が絡み合い砕け空の破片が落ちる。
しかしその空の破片は地上に落ちる事無く空と溶け合って消える。
徐々に空から降る欠片が増え空中で消える。（これが星だったらロマンチックなのに）という思いが頭の隅を駆け抜けていった。

砕けた空の向こうには本来の空間が垣間見える。それは結界内とまったく同じ空と月、雲に星だった。

「解除終わったよ」

「じゃあ、わたし行くね」

「待ってサンタさん」

セツナを呼び止める。

「何ですか？」

「言っておくけどお嬢さまの欲しいプレゼントはサンタさんじゃ絶対にあげられないよ」

「そんな事ないよ。絶対にあげて見せる」

「どうして言い切れるの？ サンタさんは知ってるの？ お嬢さまの欲しいプレゼントを？」

その問いにセツナは一つ頷いた。

「えっ……」

「じゃあ、行くね」

エリスにもう一度同じ事をいいセツナは踵を返し道なりに歩き出す。その先には大きな屋敷がそびえ立っていた。

途中。ミリアが乗り捨てたスカイボードを発見し起動させ搭乗した。

（わたしのウイングボードを壊したから乗ってもいいよね）と自身に言い聞かせ空へと上がった。

◆
「綺麗な双子月……」

窓のカーテンの間から覗く双子月を見上げる少女が一人いる。その少女はおもむろに窓をあけバルコニーへと足を降ろす。

月明かりに照らされる肌はとても白くて触ると壊れてしまいそうな儂い少女だった。風に揺れる背中にかかる長い髪。

一瞬身体を震わせ羽織っていたガーディガンを飛ばされないようにぎゅっと握り押さえる。



「これ意外といいかもしれないですよ！ トナカイさん！」

約三十分間スカイボードを楽しんだセツナがテンション高くトナカイに言う。初めて乗ったスカイボードにしてはうまく乗りこなしているセツナをみて後から追いついたソリを引いたトナカイは『調子に乗るなよ落ちるぞ』と注意を促した。

「ねえトナカイさん！ わたしコレ買ってもいいかな？ 買っちゃってもいいかな？」

「ん？ いいんじゃないね？」

「何言ってるんですか、買いませんよ！ ボードはスピードが命ですよ！ これスピードあまり出ないじゃないですか！」

「じゃあ！ 訊くんじゃねえよ！」

などとツッコこんでが当の本人はトナカイの怒りのツツコミも聞かずにスカイボードを楽しんでいた

「あーコレいいな！コレ買っちゃおうかな！ あつてもスピードでないんだった」

自分勝手な軽い怒りを感じつつセツナは屋敷の上空まで辿り着いたのだった。

「じゃあ、トナカイさん。行ってきますね」

「ああ、気をつけてな」

「はい、つと。今がちょうどいいかな」

「ん？ どうした」

「あつ、いえ、じゃあ行きますね」

「ああ。つて、おい！ セツナ」

トナカイが驚きの声を上げる中セツナはスカイボードから飛び降りていった。



「こんな私の幻想^{ユメ}は誰にも届かない……」

寝間着にガーディガンを羽織った少女は満月の双子月を見ながら呟いた。

月をふと見ると、小さな点が大きくなっていく事に気づく。その点はどうどんと大きくなりそのシルエットははっきりと人影に変わっていく。

「えっ……まさか……」

少女は黒い点に凝視する。身体を大の字にして降りてくる紅い人物。長い髪をなびかせ。紅で染まった服をためかせ降りてくる。

「サンタさん……？」

黒い点は完全に人型に変わり空中でくると回転し足から見事に着地した。

「こんばんはお嬢さん。今宵は月がとても綺麗ですね」

赤い服を着た少女はすくっと立ち上がり乱れた髪をかきあげ、寝間着の少女に言った。

「サンタさん？……なの？」

「はい。紅い服がトレードマークのサンタクロースです」

少女の目はせわしくなく傷だらけの服にその下から覗く傷ついた肌。そして蒼い光でできた剣に向けられていた。

「あつ、ごめんねこんな格好で」

セツナは沙羅双樹・桜華を後ろに隠しアストラルフォームからブレイドフォームに移行させソードホルダーに収める。

「今日はクリスマスです。なのでお嬢さんにプレゼントを渡しに来ました」

満天の笑顔で少女に語りかけるが少女の顔は疑心暗鬼だった。

「えっと……とりあえず部屋の中では話そっか？」

「本当にサンタクロースなんですか？ 本当に私が欲しいモノをくれるのですか？」

「ええ、プレゼントします」

「なら！ 今すぐ私に」

「部屋で話しましょう」

セツナは少女の脇を擦り抜けバルコニーから少女の部屋へと入った
「お邪魔します」

セツナの後に少女が続いて部屋へと戻る。

「広い部屋、畳十五畳くらいあるかな？」

「たたみ？」

「ん？ 畳ってのはわたしの故郷での部屋の広さを例える敷物かな？ 正確には違うけどね」

「ふん」

コンコン

ドアを叩く音が二人の耳に入る。少女が『誰です』と問いかけるとドアをノックした者は『ミリアです』と答える。

『どうぞ』少女が部屋へと促すと『失礼します』とゆっくりとドアが開く。

「どうしたの？ 三人揃って？」

部屋に入ってきたのは先ほどまでセツナと戦闘を繰り広げていたメイド達だった。しかもちゃっかりと戦闘で汚れたメイド服を着替

えていた。

ミリアは一度セツナに目を向けるとすぐさま視線をお嬢さまと呼ばれる少女へと向けられる。

「そのサンタクロースが本当にお嬢さまにプレゼントを渡すのを見届けにきました」

「なにその疑心？ 信用ならないわたし？」

セツナの言葉に四人は大きく頷いた。

「ううっ……師匠……わたしはまだまだ立派なサンタクロースには程遠いです……」

肩をがっくりと落とし涙声で悲しく呟いた。

「さて、サンタさっさとお嬢さまにプレゼントを渡して帰れ」

「ちょっ！ なにその暴言？ 私サンタクロースですよ？ 子供のヒーローですよ？」

「クロノ、セツナさん。お嬢さまの前です。ケンカならあとでおこなってください」

ミリアに咎められ二人は口を閉じる。

「さて、ではセツナさん。お嬢さまにプレゼントを」

「あ、そうなんですけど、少し用意がいるんで」

「用意？」

エリスが人差し指を頬にあて首をかしげる。

「それでですね……申し訳ないんですけど三人に少し手伝って欲しいんですけど……」

セツナは申し訳なさそうに上目使いで両手の人差し指を合わせたリ引いたりしていた。

「手伝いつてなにをするのですか？」

「とりあえず、部屋を出てから話します。では、お嬢さん。三人を少しお借りしますね」

ポカアンとするお嬢さまを置いてセツナとメイドの三人はそそくさと部屋から出て行ったのだった。

◆
「で、あたしらは何を手伝えばいいんだ」

「その前にこれからお嬢さんに起こることに対して口出しはしないでください」

部屋を出た途端に発したセツナの言葉に三人はきよとした顔になる。

「どういう意味ですか？」

ミリアの問いに後の二人もミリアの問いに賛同し無言で頷く。

「今は何も聞かず約束してください。後でわかりますから……」

セツナは頭を下げる。

「……信用していいのですね？」

何も答えずセツナは黙って頷く。

「わかりました。いいですね姉さん、クロノ」

エリスは『わかった、サンタさんを信じたミリアちゃんを信じる

よ』いい、クロノは『あたしもミリアねえちゃんと同じだ』といった。

どうやら、セツナのことは信じずセツナを信じたミリアを信じるようだった

「ありがとうございます。じゃあ……」

そしてセツナは腰の小さい白い袋から人差し指サイズの真っ黒い玉を三人に差し出した。

そして一言……

「このアメを食べてください」

それだけを告げて三人に真っ黒いアメを三人に手渡した。

◆
「お待たせしました。お嬢さん」

約十七分後。四人は部屋に戻り下半身をベッドに埋めた少女に挨拶をした。しかし、なぜがセツナの後ろにいた三人の表情は濁っていた。

「なにやっていたんですか？　ってどうしたの三人とも」

「ちよつと準備をね」

セツナがそういつて後ろにいる三人の顔を見たが顔が苦虫を噛み潰した様にひどく不愉快な表情だった。

「じゃあ、そろそろプレゼントを私にください」

ベッドの少女は腕を大きく伸ばし両手を広げる。

「その前にこれを食べてくれますか？」

セツナは腰にぶら下げている白い袋から真っ黒いアメを取り出し少女に手渡す。

「丸い玉……アメですか？」

「とっても美味しい『オレンジ味』のアメですよ」

「へえ、綺麗なオレンジ色……じゃあ」

少女はそれを口に入れ舌で回し始める

「うん、おいしいオレンジ味」

少女の言葉を聞いたメイドの三人の顔が変わる。

「お、お嬢さま」

一歩踏み出したクロノに手を伸ばし進行を遮るセツナ

「約束しましたよね？　クロノさん」

セツナに殺気だった目にクロノは一歩踏み出した足を退いた。

「なにになにどうしたの？　クロノ」

「お嬢さん。いつからですか？」

セツナはベッドに手を置き、ずいっと少女の目の前に顔を動かす。

「えっ？　なにが？」

「いつから『味覚』が失くなりましたか？ それともう二つ、『眼の色覚と嗅覚』も失くしましたね」

「な、何を言ってる……」

「さっき食べたアメ、あれはオレンジ味でもオレンジ色でもないです……お嬢さん。あなたは昔の経験からイメージしてそのイメージを一致させていますね？ 今のお嬢様を構成する世界は白と黒だった二色の世界ですね」

「何言ってるの？、だってオレンジ味だって……」

「アレはウソです。もし百歩譲ってオレンジ味だとしてもなんで『綺麗なオレンジ色』って言ったんです？ わたしはオレンジ味だと言ってもオレンジ色だなんて一言も言っていないですよ？ あれはとっても臭くて不味いです。それと、そのアメはミリアさんたちにも食べてもらってます」

「……！ ほんとなの……」

驚き少女は三人の顔を見た。メイド三姉妹は少女に目を合わせず俯いていた。

「そんな事ない……これは、オレンジ味だし……オレンジ色だもん……」

俯き高級そうな羽根布団を強く握り締める。

「他人の言動から自分の中にある過去のイメージを一致。再現させるという事はそういうことです」

「帰って……プレゼントなんていらなから帰ってよ！」

俯いたままセツナに怒気を含んだ声を上げる。

「体力の低下。味覚の欠落。嗅覚の欠落。色覚の欠落。このままだときっと聴覚、痛覚、触覚が失い最後に命が削られます」

「いいからさっさと私に自由の翼をプレゼントしてよ！ 私をこの屋敷おりから飛び立たせてよ！」

「古来より翼は天使の象徴です。いかにサンタクロースでも翼を背に生やすことは出来ません」

少女の怒号を聞き流しセツナは言葉を紡ぐ。

「じゃあ……！」

「ですが！ 私はあなたに『自由の翼』をプレゼントすることはできないけれど、あなたに『自由』をプレゼントすることはできます」セツナは少しだけ声を荒げ少女の顔に自分の顔を近づける。

「ど、どういう事……？」

「あなたにかけられた『希望の呪い』を私が排除します」

「呪い……」

「失礼ですが胸を見せてもらいます」

セツナは少女のパジャマを掴みボタンを無理やりはずす。

「ちよっ！ やめて！ やめてよ！」

少女は両手でセツナの顔を押すがセツナはその抵抗と言葉を無視しボタンを徐々にはずしていく。

「エリス！ 見てないでやめさせて！」

助けを求めるがエリスは助ける様子はない。

「な、なんで、助けてくれないの！」

「……お嬢様」

口を開いたのはエリスではなくミリアだった。

「どうして……どうして言ってくださらなかったのですか……味覚が無いこと……色覚が無いこと……言ってくださればセツナさんに頼る事無く私達だけでなんとかしてきたかもしれないのに」

「ミリア……」

「失礼します！」

最後のボタンをはずし、勢いよく上半身のパジャマを開く。

「や、やめて！ 見ないで！」

全員の顔が青ざめる。そこには少女の胸に寄生する口のような異形な異物ができていた。

「お嬢さま……」

クロノが呟き口のような異形な肉片は《グエツ グエツ》と奇声をあげている。

「お願い……見ないで……」

両手で胸を隠し弱々しい声で訴える。しかし交差する腕の間から見える異形な肉片は口を開け奇声上げ。それはまるで嗤っているようだった。

「なんなのこの蟲……」

エリスは少女に寄生する『それ』を見ながら震える声で発する。

「これは希望を叶える呪いの具現化した姿です。ただし叶えるたびに『代償』が必要。でもこれは最悪の部類です。軀からだの機能を代償にすることで願いを叶える。こんな、最悪最低の呪い……」

パジャマを掴む手が震え声も震えるセツナ。

「お願い……見な……い……で……」

少女の声が掠れていき、そして目を閉じる。

「お嬢さま！」

ミリアが呼びかけるために近寄ると少女はスースーかわいい寝息を立てていた。

「寝てる……?」

「さっきのアメ玉には睡夢草すいむそうの粉が練り込まれています」

セツナは沙羅双樹を腰のソードホルダーから抜き出す

「ちよっ！ サンタお前なにするんだよ！」

「言ったでしょ。わたしが呪いを解くって。じゃあ、いくよ沙羅、待機状態解除！ アストラルモード移行」

クロノを声を聞き流し待機状態だった沙羅双樹の蒼い光が伸び、再び剣に形成されていく

「お前！ お嬢さまを斬る気か！」

「斬ります」

きっぱりと言い切る。

「クロノ落ち着いて。その光の剣でお嬢さまに寄生しているあの瘤を駆除できるのですか？」

「できます」

ミリアの問いにセツナは振り返らず答える。

「そうですか、ならば一つ訊かなくてはならないことがあります」

「なんですか？」

「お嬢さまの『希望』とはなんなのですか？」

「あなた……いや。あなた達は知っているはずですよ」

「……膨大すぎる魔力による軀の異常……」

一瞬の逡巡の後ミリアは口を開いた。

「生まれながらにして魔力をもったお嬢さんはそれを治すために自ら望んであの肉塊を受け入れた。アレは魔力を無尽蔵に食る。自分の味覚や色覚を代償にしてね」

「……」

「最近落ち着いているんじゃないんですか？」

「……」

ミリアは何も答えない。横目で後ろにいる二人にも目を向けたが答えなかった。

「わたしの師匠が言っていました。あの子は『魔術師』の素質がある。だから元気になったら魔術師養成学院マジックアカデミーに入学させたらどうだって。そこで魔力の制御を学べって」

「本当に……本当にお嬢さまは……治るのですか？」

「治ります！ この沙羅双樹があれば」

その力強い意思と言葉を聞いて、ミリアとクロノ。そしてエリスは上品にお辞儀をした。その行動は従者が主に頭を垂れるそれとなんら変わらない優雅がお辞儀だった。

それを見届けずセツナは蒼い光の剣を振り上げる

「沙羅、あの肉の塊の名称は」

はい、アレは《魔喰虫》ましょくちゅうという人に寄生する蟲です■

「了解」

左目の瞳に投影され描かれた文字を読みセツナは唱える。

「魔喰虫の生命へ干渉開始」

ゆっくりと一言、一言しっかりと口上し蒼い光の剣を少女に、成長途上のはだけた小さな胸に寄生し醜く嗤う肉の塊めがけ振り下ろす。

蒼い光が少女の胸を斬り抜ける。胸に寄生していた肉塊は奇声を上げ少女の胸から紅い霧になって消えていった。

「これで、大丈夫なんですか……」

「はい、目が覚めたらきつと元気になりますよ。あつ、そうだ」
セツナは何かを思い出したように紅い服のポケットに手を突っ込み何かを探し出す。

「えっと、どこだったかな……あつ、あつた！」

ポケットからだしたのは小粒の銀色の珠で数珠繋ぎされた十字架のペンダントだった。

「このペンダントをお嬢さまに渡してください」

「ペンダント？」

「このペンダントは師匠が創った魔法具で魔力を自然放出機能があります。身に着けているだけでいいそうです」

ミリアにペンダントを渡しセツナは待機状態に移行した沙羅双樹をソードホルダーに戻す。

「あ……いいのですか？」

「ええ、二年前に欲しいプレゼントをあげられなかった師匠のせめものの償いだそうです。それと『あの時は何もプレゼントできなくてすまん』と言ってました」

「ありがとうございます！」

ミリアはお大きくセツナにお辞儀をしセツナに御礼をする。

「じゃあ、わたしはこれで帰ります」

「あ、待って」

「なんですか」

「その……お嬢さまの治療をして頂いたのに戦ったりして申し訳ありませんでした」

何度目かわからない行儀のいいお辞儀をセツナに贈る。

「いやいや、いいんですよ。お互い譲れない事だってあるし。その結果がああ戦いでしょ」

「ですが……」

「ホントに気にしないでください。戦いなんてクリスマスの時期にはしょっちゅうだし」

「し、しゅっちゅうなんですか？ クリスマスなのに？」

「ええ、子供たちは世界にたくさんいますし。戦場を抜けないと辿り着けない街だってありますし。この時期が一番苦勞する職業ですよ」

「へえー 大変なんですね」

心底感心した声を口から吐く。

「じゃあ、わたしはこれで。あつ、そうだ」

セツナは『すいません。玄関まで案内してくれませんか』と、寝息を立てて寝ているお嬢さまの寝間着を変えている長女に問いかけた。



「すいませんね。この屋敷広くて玄関どこかわからないですよね。ほら、わたしって窓から入ったじゃないですか？ 流石に帰るときも窓からってワケにはいかないじゃないですかあゝ落ちるし」

ワザとらしく語尾を延ばし話す。

「本当なら煙突からはいるんじゃないの？ サンタクロースって」
「それは迷信ですよ。もし暖炉を焚いていたらわたし丸焦げじゃないですか。焼かれるサンタなんて見たくないでしょ」

一階に続く横幅が広く長い大階段を降りる紅い服を着た少女とメイド服を着た少女の二人。その降りる途中での会話が繰り返されている。そんな他愛も無い会話をしながら一段、一段と階段を下る。セツナが笑いながら話すのをエリスは適当な相槌で答える。

セツナはそんなエリスの態度もお構いなしに空気も読まず話す。
エリスもそんなセツナの態度もお構いなしにマイペースで答える。
二人の『ある種ぎこちない』会話も一階が見えるところお互い何も話さなくなった。

ギイ、ギイ、ギイ、

木製の階段を降りる度に軋む音が屋敷に響く。

「ひとつ、引っかかっている事があるんですよ」
セツナが沈黙を打ち砕く。

「何が、ですか」
振り向きむせず階段を降りながらエリスが口を開く。

「あなたが言った『なにあの蟲』発言に」

エリスの階段を降りる足が止まる。それを見届けセツナの足も止まる。

「やだなあ、わたしがそんなこといいました？」

「師匠が言っていました。無意識に発せられた言葉の中に真実がある」と

「何言ってるんですかあゝ サンタさんが言ったじゃないですか。あの蟲の事」

「……師匠はこうも言っていました。追い詰められた人間ほど笑顔になると。相手に焦っているのを悟られないために」

エリスの顔を見たセツナはそう言った。そのエリスの顔はともにかわいらしく極上と言ってもいいほどの満点の笑顔だった。気落ちした時に見たら誰もが元気になるほどの笑顔だった。

「最初、あの肉の塊を見た時にあれが蟲だなんて誰もわからない」

「でも、サンタさんは知ってたじゃないですか」

「わたしが知ったのはあの蟲を斬る直前に沙羅が教えてくれたからです。でもあなたはその前に『蟲』と言っていました」

「じゃあ、なに私が最初っからあの蟲の事を知っていたと言うんですか？ サンタさんは」

「はい。わたしにはあなたが初めからあの蟲の事を知っていたと思いますません」

「もし、そうだとしてもどうして私の主にそんな事をしないといけないの？」

「苦しんでいるお嬢さんを助けたかったから」

「……！？」

「……笑顔が消えましたね。でも、怒ってるのかな？ その顔もかわいいですよ」

セツナの皮肉を受けセツナを睨んでいたミリアははっ、と我に返り俯いた。

「あなたはお嬢さんの魔力の暴走をどうにかしたかった、どうにかしたかったひとつの答え。それが魔力を食い潰す蟲、魔喰虫」

「何も反論がないから続けますよ。あなたは蟲をお嬢さまに寄生させた。その結果魔力の暴走はなくなったけれどその代わりに身体の五感を失う事になった」

「サンタさん……」

俯いていたエリスはスカートをゆっくりと上げる。

「ちよっ……！」

その白く綺麗で幼い両足の太もものガンホルダーには二挺の銃、セラフイムとアリエルが巻かれていた。

そして、流れるような機敏な動作で右手でセラフイムを抜きセツナに銃口を向ける。

「なんか……私の推論があたっちゃったみだいですね」

「サンタさん……わたしねルフィアお嬢さまを助けたかったんだ。苦しみから助けたかったんだ」

「そう思うならそのルフィアお嬢さんに全て話せばいいでしょ」
対峙する二人。目の前で、銃口に息が届くくらいの位置で向けら

れているセツナの右手は沙羅双樹の柄を握りいつでも抜刀できる状態に持っていていた。

「ダメだよ。いくら知らなかったとはいえわたしはお嬢さまに命の危険に晒してしまった。従者として仕えるものとして私はやってはいけない事をしてしまったの」

「で、わたしを殺してなかった事にすると。全てを闇に隠すと」

「ごめんね。サンタさん」

銃口の重圧に押され汗が流れる。『ごめんね。サンタさん』の後から動かない。静かに時が流れる。

外には真っ白な雪が降り大地は白銀に染まっていく。風は静かに流れ木の上に積もった雪を落下させる。

「その剣を捨ててください」

後ろに回した手を、腰に差した沙羅双樹の柄を握るセツナの手を見つめる。

「それは交渉の余地があると見ていいのですか？」

「交渉はありません。反撃されないよう確実に仕留めるための準備です」

「……用心深いんですね」

セツナは沙羅双樹をソードホルダーから抜き頭上に高々と挙げその場で手を放す。

落ちる沙羅双樹に目を向けるエリス。柄が床に触れる刹那、沙羅双樹が急激に百八十度回転する。

「！！」

エリスはとっさに引き金を引く。

発射される銃弾をセツナは沙羅双樹ではじく

それは一瞬だった。

床に触れる沙羅双樹の柄をセツナは右足のつま先で振り蹴り百八

十度回転させた。

回転した沙羅双樹の柄がセツナの手のひらに収まる次の瞬間にエリスの銃弾が飛びそれを飛び退きながら沙羅双樹で落としていた。

エリスは銃撃を休めずさらに弾幕を増やす。しかし、それをセツナは沙羅双樹を舞わせことごとくはじき落としていく。

後ろに引き下がりながら弾丸を落とすセツナをエリスはただ、ただ見ていた。観察していた。

そして、セツナが屋敷の柱に追い詰めるとエリスは銃を降ろした。

「どうしたんですか？ もう終わりですか」

セツナが問うとエリスはゆっくりと銃口を自分のこめかみに当てる。

「ちよっ！ なにやってるんですか！」

「サンタさんの口が塞げないなら自分の口を塞ぐしかないでしょ」

セツナが愚かな行為を止めようと動き出すと『動かないで！』と制す。

「ごめんね。サンタさん」

「……」

セツナは何も答えずただエリスを睨むだけだった。エリスがセツナを見ていたのは自分が自殺できる距離までセツナを離すことだった。

「ミリアちゃんとクロノちゃんに説明お願いね」

「……」

「……じゃあね、ばいばいサンタさん」

自分の手で自分を殺す愚かな引き金を引く。優しく引かれた引き金下りる撃鉄。急激な速度で弾き出される死へと誘う凶悪な弾丸。

……の、はずだった。しかし、引き金が引いても弾丸は射出されることはなかった。弾は竄めた。弾はまだ残っている。弾切れはありえない。

エリスはもう一度撃鉄を上げ引き金を引いた。が、結果は同じだった。

「そんな……どうしてセラフィム……」

銃の異常か弾丸がないのかわからないがセツナは向こうのトラブルに乗じてエリスに向かい猛ダッシュを翔ける。

その時、二つの影が同時にセツナの両脇を抜けた。

その影はミリアとクロノだった。

抜けた影から雫がこぼれる。その雫はセツナのほおではじけ一筋を残す。その雫はともしよっぱい雫だった。



「姉ちゃん！ 止めなくていいのかよ！」

「今出て行ったら姉さんは確実に自分の頭を打ちます。セツナさんが何かしゃべっているから様子を見るべきです」

「でも、銃口を頭に当ててるんだぜ！」

「今は、セツナさんに全てを任せるのです」

「……くそッ！」

二人は階段の踊り場で身をかめ息を殺し小声で話し合いセツナとエリスの見ていた。

そして、見守る事数分。

エリスがなぜか銃を見つめ呆然としていた。

「姉ちゃん！」

「今です！ 行きますよクロノ！」

二人は銃口から飛び出す弾丸のように階段を飛び降りエリスの元

へと疾走した。その途中でセツナを追い越していくミリアとクロノの頬には無数の雫が流れて筋を構成していった。

「ミリアさん!？」

二人の姿を確認したセツナはスピードを急激に殺しブレーキをかけた。



「ダメ! 来ないで!」

銃口を翔けて来る二つの影に向ける。しかし二つの影は止まる事無くエリスにさらに加速をかけ迫る。

「止まって!」

銃口を向けているが引き金は引かない。威嚇ではないが引き金を引けば確実に直撃^{あた}る。直撃させる自信がある。

しかし、引かない。引けるわけが無い。引いてしまえば最愛の姉妹達を殺してしまい命の幕を降ろしてしまう。

そんな事出来ない。出来ないからこそ。

「姉ちゃん! ゴメン!」

クロノは姉に一言侘びを入れ右脚をエリスの左脇腹へ蹴りを見舞う。その衝撃で二挺銃を落とし蹴り飛ばされた先にはミリアが待ち構え倒れかけるエリスをしっかりと抱き止める。

「大丈夫ですか? 姉さん」

「クロノちゃん……容赦ないなあ……」

「大丈夫そうですね。では失礼します」

ミリアもクロノと同じように一言侘びを入れる。

「えっ?」

パチン。

赤く染まった左ほおを押さえるエリス。

「ミリアちゃん……」

平手打ちをされたエリスはきょとんとしてミリアを見ている。

「もう……もう二度と自らを殺す行為はしないでください！」

強く硬い口調をエリスに放つ。

「でも……私は……」

「しゃべるな、偽善者……！」

エリスの言葉を遮りあとに続いたのはセツナだった。

「お嬢さまをあんな状態にしたから死んでお詫びをする？ あんたバカ？ そんな負い目を感じているなら生きて償え。死での償いはただの逃げ。その人からの逃避」

「逃避……」

「さらに言えばあんたの命に価値は無い。死にたかったらお嬢さまが死ねと言ったら死ね」

「セツナさん！」

エリスの側にいたミリアがセツナに強く口を開いたが、セツナは何も答えず、何も感じず口を開く

「いやなら部外者のわたしがあなたを殺してもいいんですよ？ この二人じゃムリそうですね」

「てめえ！ それが子供に夢を与えるサンタの言う台詞せりふか！」

「ええ、サンタの台詞ですよ。わたしはあなた達に夢を与えに来たのではないんですから」

「おまえ……」

恐ろしく冷めた口調、感情の温度が感じられない氷の表情でセツナはクロノに視線を向けていた。

そして、セツナは腰のソードホルダーから沙羅双樹を抜く。

「セツナさん！ 待ってください！」

「いいよ。ミリアちゃん」

立ち上がり、一歩前え歩み寄る。

「でも、サンタさんの手はわずらわせないよ」

エリスはチラりとミリアの刀、床に放つてある輝夜月かぐやつきを見る

「姉さん！」

エリスの視線に気づき床の輝夜月かぐやつきに手を伸ばす。が、寸手遅くエリスが蹴り上げる。

「サンタさん。やっぱりわたしはダメ。ここで終わり」
手に取った輝夜月の刃を首元に当てる。

「ミリアちゃん、クロノちゃん。ごめんね。こんな姉でごめんね」
「やめてください！ 姉さん！」

「姉ちゃん！ やめてくれ！」

姉妹の嘆きの絶叫をも聞き流すと刃を首の動脈に当てる

「お嬢さまをよろしくね。ミリアちゃん。クロノちゃん」

「姉さん！」

「姉ちゃん！」

エリスは刀を持つ腕に力を入れそのまま引き抜く

「やめて！ やめてよ！ エリス」

聞こえてきた金切りの大声にエリスは腕を止める。

「お、お嬢さま……」

「どうしてそんなことするの！？」

二階の階段踊り場の手すりから乗り出した白い高級なシルクの布で創られたネグリジェを着た少女が叫ぶ。

「私は！ ですがお嬢さまに大変な事を……」

「何？ 聞こえないよ？」

「私は！ お嬢さまに大変な事をしてしまいました」

「そんな事気にしてない！ 私は大丈夫だから死ぬなんてやめて！」

「ですが私はお嬢さまのお身体を不自由にしてしまいました！」

「サンタさんが治してくれたから私の身体なら大丈夫だから！ ひ
とりでここまで歩いて来たんだよ！」

「……」

「ベットから出れなかった私が、部屋から出られなかった私が、歩けなかった私が、ひとりでベットから出て、部屋のドアをひとりで開けて歩いてここまで来たんだよ！ だから……これから外だっていける！ いっしょにお出かけだっていける！」

「お嬢さま……お嬢さま……！！！」

手に持ったミリアの刀、輝夜月を落とし階段の上階にいる少女に思いつきり大きな声で叫び自分も膝から崩れ落ちる。

「エリス……待ってて！ 今そっちに行くから！」

おぼつかない足取りで階段を下りる。階段の手すりを頼りに一歩、一歩と一段ずつゆっくりと降りる。

「お嬢さま……」

エリスは少女に導かれるように一目散に駆け寄る。駆け寄るが階段を駆け上がりず一番したで少女を待つ。

そして、待つこと数十分。手すりを頼りに階段を降りた少女を階下を待ちうけたメイドが抱きとめる。

「申し訳ありません……申し訳ありません……」

「エリス……」

抱き合う二人。涙を流し抱き合う二人を見つめセツナは落ちたミリアの刀、輝夜月かぐやつきを拾い上げミリアの元に歩み寄る。

「セツナさん」

「じゃあ、もう大丈夫そうだからわたしそろそろ帰りますね」

輝夜月かぐやつきを渡しそう告げる。

「それと、最後に一言」

セツナの真剣な眼差しにミリアは気を引き締める。

「これからお嬢さまにウソをついて下さい」

「ウソ……ですか？」

「そうです」

「なぜですか？ 私たちはお嬢さまに仕える身です。主に対してそのような行為はとうていできません」

「あのお嬢さま純粹です。純粹であるが故に人を疑う事を知らない」
「それでいいではありませんか」

「確かにそれがお嬢さまのいい所でもあります、ありますが、同時に『疑心』が欠落していると言えます」

「疑心が欠落？」

「はい。思い出してください。わたしがアメを差し上げた時の事を。あの時お嬢さまはなにも疑わずに『オレンジ味』と言ったのAMEを口に運びました。」

もしこのAMEに毒が盛られていたらどうしますか？ まあ実際に睡夢草の粉がまぶしましたけど」

「それは、また……あのような蟲を……姉さん以外の誰かに体内に埋め込まれるというのですか？」

一瞬、逡巡したのち苦い顔をし『蟲』と漏らす。

「ゼロではないと思います。今のお嬢さまは疑う事を知りません。これから先、外出の機会が増えるだろうし、もしかしたら魔術師学院に通うようになるかもしれません。ヒトを疑うココロを持たないときつと何かの事件や事故に巻き込まれます。必ず」

「必ずですか……なぜそう言い切れるのです？」

「……裏切られた……憧れていたのに、焦がれていたのに……」

「セツナさん？」

セツナは空を見上げる。見上げた空は暗く、二つの月が綺麗に輝く。その空の向こう、その月の向こうにある蒼い思い出をいやがおうなく引き出される。

あの時もこんな綺麗な双子満月だった。

夜空にぽつかりと空いた二つの円形の月を見つめる。

「セツナさん……？」

もう一度名前を呟く。その横顔は月明かりに照らされてとても寂しそうだった。

「あ、ごめんね。浸っちゃって。話戻すね」

「えっ？ ええ」

「それで、すべての言葉にウソをまぜるのではなくて十の言葉の内、一つのウソを混ぜてください」

「十の言葉の内に……ひとつのウソ……」

「ええ、それで大丈夫です。いつかすこしずつ疑心が芽生えます」

「……なぜか……気乗りしないのはなぜでしょうか……」

「えっと……お嬢様の成長のためと思って一つお願いします」

「はあ、わかりました」

しぶしぶ納得したミリアに別れを告げ大きな扉のノブに手をかける

「あっ、そうだ」

何かを思い出したのか振り向き再びミリアの方へと歩み寄る

「どうしたのですか？」

「えっと、姉の責任は妹が取るっていうのはアリですかね？」

後頭部をポリポリとかきながら申し訳なさそうに尋ねた。

「は？ 姉さんが何かしたのですか？」

「えっとですね……」

こっそりと耳打ちをし密かに話し出した



「トナカイさ〜ん、お待たせしました！」

上空で待機しているトナカイに呼びかける。

「どうだ、終わったかあ〜」

「は〜い、万事完了です」

「わかった。今行く」

トナカイは空飛ぶソリを引き地上へと降りてくる。

「よし、帰るぞ、忘れ物はないな」

「大丈夫です帰りましょう」

空飛ぶソリに乗り込み左外壁を引き上げ沙羅双樹を差し込む。

「よしっ！　じゃあ行きますか」

引き上げたソリの外壁を押し込み元に戻しながら飛び立つ空を見上げる。雲ひとつ無い夜空、双子月が輝く空。

『終わったんだ』と誰にでもなく呟くセツナ。同時にトナカイは前足で空を蹴り空へと飛び立つ。空を駆けるトナカイとソリ。

月の光に映える紅い服。なびく髪が今　空にすることを思い知らされる。

ふと、セツナが屋敷を見るとセツナが侵入したバルコニーからエリスとその主の少女が手を振っていた。大きく大きく大げさに手を振る二人を見てセツナもまた、ソリから大きく大きく大げさに二人に見えるように手を振って返した。

「本部に帰ったらケーキだぞ」

「わかってますよ。イチゴがたっぷり乗ったケーキを用意しますよ」
こうして、一人前のサンタになった少女の最初の聖夜が終わりを告げた。

（来年もここにくるんだよね……また戦うのかな……）

と、来年の不安を抱き夜の空へと消えていった。



「さてと、もうすぐ来るかな」

あの夜から二週間後、サンタクロースの少女は再び広大に敷地にある屋敷の門へと訪れていた。訪れたと言っても今回は空飛ぶソリで訪れたのではない。

自宅（サンタクロース本部）から蒸気列車を乗り継ぎ、徒歩でここまで来たのだった。もちろん、今日は紅いサンタの服ではなく赤いベストに白い長袖、その下に白いワイシャツを着こなし、ぶかぶかのズボンを着いていた。そしてなぜ、セツナは再びここに来たかたは理由があった。

「でも、なんて沙羅も持って来てなんて書いてあるんだろ」

手渡された紙には住所のほかに『屋敷に来る時には刀も持ってきてください』と明記してあった。

「うーん、なんだろうな　わたしの刀を見たいのかな　そんなに珍しい刀でもないのにな」

刀自体に意思があり、なおかつ条件が揃うと変化する刀などこの世界に何本も無いのだが悲しいことにセツナはその事に関して自覚が無いようだ。

その選択肢しか思いつかないが玉にキズなのだが。

「あっ！　来た、おい、ミリアさーん！」

セツナに向かい歩いてくるあの時と同じメイド服を着ているミリア。その両手には大きな板が持たれていた。

「お待ちせしました。セツナさん」

「どうも、お久しぶりですミリアさん」

お互い挨拶をし、ミリアはさっそく両手に持った板をセツナに差し出す。

「では、約束のウイングボードです。姉さんが壊したのがどの製品だったか燃え尽きてわからなかったので一番最新の機種を買いました」
差し出されたウイングボードを受け取った瞬間、目が大きく開くほど仰天した。

「ちよっ！　これって、ライトニング社の疾風^{はやて}じゃないですか！　いいんですか？　こんな高価な最新機種！」

店頭で見かけた最新ボードが目の前にある。それだけで興奮。テンションもハイになり食い入るようにウイングボードをまじまじと見つめる。

「姉さんがお詫びにと。それとそのボードにはスカイボードと同じ風の飛翔回路が組み込んであります。数分ですが空を飛行できますって……聞いています？　セツナさん」

セツナはウイングボードにほおづりをし、『ああっ、すごくいいフォルム……』とつぶやきうっとりとしていた。

「……セツナさん、慣らし走行しますか」

少しあきれ気味で提案したが案の定、セツナは乗り気で『慣らし走行?! します!』と元気よく答えた。

「では、その前に少し私の練習相手を務めていただきます」

そう言いミリアは腰に携えた輝夜月かぐやつきを抜く。

「へっ?」

すっとんきような声を上げるセツナにミリアは畳み掛ける

「何のためにその刀を持って来てもらったと思ってるんですか?」

「えっと……あはは、どうしてもやらないとダメなのかな?」

先ほどの自分の甘さを自身で苦笑する。

「ダメです。でなければそのボードを返して頂きます」

「え………わかりましたあ。じゃあ、ミリアさんの気が済むまで付き合いますよ」

観念したのかセツナも沙羅双樹を抜く。

「では、行きますよ」

「確か、『練習相手』だったはずですよね?」

「ええ、そうです」

「じゃあ、なんでそんな本気モードなんですか?」

正眼の構えをするミリアから発する闘気は聖夜の夜に対峙したそれとまったく同等のものだった。『目の前のサンタを殺す』それと同じ。

すべてを排除するあの時のまったく同じ闘気だった。

「同じ刀での練習相手はなかなかいないので。本気で行きます」

「言っておきますけどそれって練習じゃなくてただの勝負ですよ」

「そうですね。訂正します。セツナさん、初めに勝負をしましょう」

（そっちの訂正!）

心で大きく絶叫しツツコミを入れる。

「では、始めましょう」

「わかりました。そっちが本気ならわたしも本気で行きます」

お互い目先に剣先見据えまっすぐ刀を構える。静寂が包み風が一瞬の突風を生み落ち葉が舞い上がり互いの髪がなびく。

「いざ尋常に！ 勝負！！」

二つの声が重なり同時に駆け出した。

そして、森には鋼が打ちあう打撃音が鳴り響いた。

聖夜幻想物語 完

オマケ／学園セツナちゃん・MNP開始記念版

※注…ここからは本編とはまったく無関係で物語が進みます。I
fの物語としてお読みください。

「アスカ！お昼一緒にたべよ」

紺色のブレザータイプの制服を着た白雪刹那しらゆきせつなは教室のドアを勢よく開いた。教室内には意外と生徒が多い。どうやら21Bでは学食派はあまりいないようだ。

セツナは目的の人物の席まで一目散に進む。いつも座席の最後尾、窓際の席に座る黒髪のツインテールにミスマッチな青い瞳の少女、名を蒼羽飛鳥あおばあすかの元にたどり着く。

「アスカ、お待たせ」

「別に待ってないわよ」

アスカはおにぎりを食べながらカタログか何かを読み、冷たい返答。しかしセツナはお構いなしに隣の机とイスをアスカの机にくっつけ腰を下ろす。

「あれ、なにケータイ変えるの？」

セツナは持ってきたお弁当を広げアスカの読んでいた携帯電話もカタログを覗き込み訊く。

「うん、ダケモから変えようと思ってね」

「キャリアごと変えるの？」

セツナは少し驚きアスカはカタログから目を離さずに『そう』とひとつ頷いた。

「アスカさ〜ん！」

その時勢いよく教室に突入する女生徒がひとり現れた。

「やりました！ 入手困難なWVⅠウヴイー手に入れました！」

女生徒が高々と掲げた手の先には弁天堂最新ゲーム機WVⅠウヴイーの箱があった。

「マジでか！ さっそく今夜遊ぶわよ！」

アスカが歓喜の表情で叫ぶ。

「はい！」

なぜか勝ち誇った面持ちでセツナとアスカの元へと歩む少女の名は緋波真奈ひなみまな。栗毛色の長い髪と紅い瞳が印象的な少女だった。

ちなみにアスカとマナとはある事情で一緒に住んでいる。

「いや〜午前中に学校さぼって買いに行った甲斐がありましたよ」

セツナに『あ、セツナさんこんにちは』と一言交わし、アスカの

席に向かい合わせに机をくっつける。そしてWVⅠウヴイーの入った袋を自分の机の金具に引っ掛け、再びセツナとアスカの元へと向かう。

「お腹すきましたあ〜」

WVⅠウヴイーの袋と入れ替えに自分の鞆を持ってきたマナはその中からお弁当を出し

机上に広げる。

「ねえ、マナっち、制服のままで大丈夫だったの？」

「はい、わたしの制服無改造なんで地味なんです」

マナの制服は紺色の背広型ジャケットにスカート、胸にはリボンといった天楼学園標準の制服。そしてセツナの学園では制服の改造が認められている。制服と判断できる程度までだが、それでも生徒は自分の好みに制服を変えられるという事でこの学校を選んでいる生徒も少なくない。ちなみにセツナはスカートを若干短くしブレザーの肩口に大きなボタンを縫いつけ胸元はリボンではなくネクタイを締めている。アスカはというとスカートはセツナと同じだがサイドからサスペンダーのベルトを垂らしブレザー下からは白いワイシヤツがだらしなくはみだしている。

「あれ、なんですか？ ケータイ変えるんですか？」

マナもアスカの携帯電話カタログに目をやり訊いてくる。

「うん、ダケモから変えようと思ってね」

カタログから目を離さずセツナと同じ返答をする。

「ちょっと待ってください！ そ、それってMNPでダケモから他キャリアに変えるって事ですか！？」

「そだよ」

「駄目ですよー私のダケモのファミリー割引が適用されなくなるじゃないですか！」

さも悲しい顔でアスカに懇願するがアスカは『大丈夫、ひとりでも割が新設されるから』と

いい、ダケモカタログを見せる。

「でもおー私はアスカさんと同じキャリアがいいんです！」

「じゃあ、わたしと一緒にMNPするの？」

「はい！ 私もモバイルナンバーポードビリティーします！」

「いいの？ あんた確かこの前機種変したばかりじゃないの？」

「いいんです！ アスカさんと一緒なら」

マナの強い決意を受け止めアスカは『わかったわよ』と言った。

（携帯かぁー そういえばもう何年も変えてないなー）

セツナは自分の携帯をブレザーの胸ポケットから取り出す。セツナの携帯電話は年季の入ったストレートタイプの携帯電話だった。メールは送れるが絵文字は使えず、ネットには繋がらない（携帯専門コンテンツなら接続可）液晶最大表示色数はモノクロでたったの4色。

さらに今では当たり前のカメラ機能がない。ディスプレイサイズも一・五インチの小さい画面だった。見るからに時代遅れの携帯だ。アスカとマナを見る。二人はEU携帯カタログを見てなにやら話している。そして、誰も見ていないダケモとミストバンクの携帯電話カタログが放り出されている。

セツナは携帯を机上に置きミストバンクの携帯電話カタログを手に取りページをめくる。

（へえ〜最近の携帯はすごいな〜画面がカラーなんだ。ワンセグ？ぶ、ぶるーとうーす？ なにコレ？ えっ、なに？ 携帯で音楽まで聴けるの！？）

最近の携帯事情に驚きを隠せないセツナ。ふと、ひとつの携帯電話で目が留まる。

（この携帯変わってるな〜横にスライドするんだ）

その携帯は液晶テレビが有名なメーカーが手がける携帯で液晶画面が縦から横に変形する携帯だった。

「セツナさん。こなたケータイに興味ありますか？」

「こ、こなたけーたい？」

話しかけたマナはニコニコしながらセツナの眼鏡に止まった携帯とセツナを交互に見る。

「マナ、そんなマニアックなことセツナがわかるわけないでしょ？」

「でも、最近は正式名称よりこなたケータイのほうが広まっていますよ」

「それは一部の地域だけでしょうが」

「まあ、そうですね…」

二人はある程度会話をするとアスカが「セツナはその携帯でいい

の？」と突然話を振ってきた。

「えっ？ わたしは別に変えるなんて言っていないよ？」

「いい機会だから変えなさいよ。そんな古い携帯なんて使ってる女子高生いないよ」

「そうですよ。このこなたケータイにしましょうよ」

二人の勧誘にうーんと、セツナは悩む。携帯電話なんて電話ができればそれでいいと考えるセツナは機種変にはまったく興味なかった。今日までは。しかし、何年ぶりかに見た携帯電話のカatalogに載っていた携帯電話のフォームはとても魅力的だった。

しかしセツナにはひとつネックがあった。それは値段だ。携帯電話は高い。一度ショップで見た値段は二万〜三万が占めていた。

「でも、値段が高いんでしょ？」

セツナの質問に二人は「はあ？」とすこしあきれ顔をしてセツナを見た。

「セツナはホントに携帯に疎いね。いい携帯には……」

「アスカさん。わたしに説明させてください」

アスカの言葉をマナが遮り説明を買って出る

「セツナさん。いいですか？ 携帯の値段は使用期間によって決まるんです」

と、マナが携帯電話の値段のなんたるかの説明をはじめめる。

「使用期間？」

「そうです。見たところセツナさんのケータイはだいぶ年月が経ってますね？」

「うん、だいたい五〜六年かな？」

「なら、二十四ヶ月以上ということになります。それだったら型落ちモデルで大体五千円から六千円で機種変できます」

「えっ！？ そうなの？」

驚愕の事実を叩きつけたセツナの顔は双眸が見開く。

「なおかつMNPを行使すれば最新機種が新規の値段で買えます。ですがこれはキャリアを変えるのが前提ですが」

「うんうん」

「そしてさらに安くなる方法があります」

「なに？ なに？ それはなに？？」

セツナは興味津々でマナの話聞き入る。

「キャンペーンを利用することです」

「キャンペーン……」

生唾をぐくつと飲み込みマナを言葉待つ

「そうです。だいたい各社キャンペーンを行う時期があります。そのキャンペーンを利用することによって約五千円は安くなります」

「ほんとに？」

嬉々としてマナを言葉を一言一句聞き漏らさずに構える。

「はい、ですが注意してほしいのが各社異なりますが、キャンペーン対象機種、割引適用条件があります」

「対象機種ってのはわかるけど、割引適用条件って？」

マナはアスカのポカリを一口飲む。アスカは「ちよつと！」と咎めるがマナはお構いなしに話を続ける。

「割引適用条件というのは契約時に特定の割引サービスや年間割引サービス、それとパケット通信料定額サービスに加入することです」

「そんなに加入するの？ それって確か月々の基本料金に上乗せされるんだよね？」

「ええ、年間割引サービスは料金はかかりませんがそのほかは上乗せされます。ですが考えてみてください。契約時に割引適用サービスに加入しても別にずっとそのサービスを利用しなければいけないということは一言も書いてません」

「……どうのこと？」

「つまり、契約時にサービスに加入して新しい携帯を手に入れてしまえば、あとは利用するか解約するかは私たちが決められるということです」

「それって……つまり……」

ズズッと顔がマナに近づく。

「そうです。契約してすぐ解約してしまえば月々の使用料は抑えることができます」

「なるほど……」

「要約すると、セツナさんの場合は、MNPをしてさらにキャンペーンを使えばかなり安くケータイをゲットすることができますし、MNPをしなくても安く機種変することができます」

「なんだろう？　なんかすごい機種変したくなってきた」

「そうですかじゃあさっそく、明日は土曜なんで行きましょう！」

こーして、セツナはマナの説得により機種変することとなった。

もちろん最後の最後でセツナが「ところでMNPってなに？」と訊いて来たのは言うまでもないことだった。

「ちょっとオオオオオオ！　なにやってんですかアアアアア！」

アスカとマナは今日購入したWVI^{ウワイ}をさっそくテレビに接続し、ファミコンゲームをダウンロードした。ダウンロードしたゲームは後々カートで爆走したりゴルフやテニスをこなすようになる国民的なヒゲのおじさんが初めてお姫様を助け出すゲームだった。

マナはアスカのふがないプレイでお怒り気味だった。それはそうだろうなぜならアスカは一番最初の敵、クリ坊でなにもせずに突っ込んだのだから。

「なに？　このゲーム攻撃とかできないの？」

「Aボタンでジャンプして踏むんですよ！」

「どこよ？　Aボタンって？　あ、これ？」

「ちよっ！　そのAボタンじゃないですよオオオオオオ！　Aボタンはここです！」^{ウワイ}

アスカはWVIのワイヤレスコントローラー十字キー横のAボタンを押した。もちろん何も起こるはずもなくクリ坊に当たり、軽快な音と共にヒゲのおっさんの残機が一人減った。

「ここ？　ここ2つて書いてあるじゃん！　ここ2ボタンじゃん！」

「あ~~~~もう！　このゲームはファミコンなんですから1をBボタン、2をAボタンとして捉えてくださいよ！」

「ふ〜ん、わかった」

マナのゲーム操作のノウハウを教わったアスカはゲーム再開。

「アスカさん……Bダッシュをお願いします」

「おっけい」

Bダッシュした瞬間、クリ坊に当たり軽快な音と共にヒゲのおっさんの残機が一人減る。

「……なんとなくなかったですよ……」

画面には悲しい音と共に『GAME OVER』と映し出されていた。

こーして、アスカとマナのWV^{ウヰー}I初プレイの夜が更^ふけていった。

土曜日　午前十一時三十七分　アキバ、エドバシカメラ前

「セツナさん、遅いですね」

「う〜ん、なにやってんだろ？　セツナのやつ」

アスカとマナは待ち合わせ場所であるアキバエドバシ前でセツナを待つ。今日は休日なのでアスカは大きな目の白のワイシャツに緩く締めた紺のネクタイに黒のミニスカート、足にニーソックスを履いた格好。マナは白いワンピースに同じく白のカーディガンを羽織っている。

あはは〜バルサミコ酢〜　あはは〜バルサミコ酢〜

マナの鞄からから音が流れてくる。マナは鞄の中から着ボイス

が流れる携帯を取り出し着信相手を確認する。

「あ、セツナさんからだ。もしもし。セツナさん」

携帯の通話ボタンを押しセツナとの回線を繋ぐ。

《あ、マナっち？ あのださ、エドバシカメラってどこにあるの？》

「その前に、セツナさん今どこですか？」

《えっと……アキバの駅だけど》

「アキバのどこですか？」

《……ただっ広い、広場みたいな場所かな？》

「じゃあ、右のほうにケータイショップみたいな店ありませんか？」

《うん、あるある》

「なるほど、そこは電気街口ですね。ひとつ訊きますけど、改札から出た時、右からませんでした？」

《右からでた》

「では……あつ、そこで待っててください。今から迎えに行きますから」

《ホント？ ありがとう》

「では、十分くらいで着きますから」

《うん、待ってる》

「じゃあ、待っててくださいね」

《わかった》

マナは通話ボタンを押し通話を終える。

「セツナなんだって？」

「ここがわからないみたいなんで、ちょっと迎えに行ってきますね」

マナがアスカのそう告げるとアスカは「わたしも行くよ」と言っ
てマナについてきてくれた。

こーして二人はマナの待つ電気街口へと向かったのだった。



「秋葉原って……すごい混んでるなあ」

駅中か駅外か微妙な位置にあるコンビニでアップルジュースと買
いアスカとマナを待つセツナ。

「もうすぐこの携帯ともお別れか」

鞆から携帯を取り出し思い出にふける。過去に届いたメールやア
ドレス帳を開く。

（そういえばミリアさん、元気にしてるかな）

交換留学生だったミリアから届いたメールを読み彼女の事を思い
出す。

（生真面目で、いい人だったな）

「あれ？ セツナちゃん？」

「へっ？」

突然の声にセツナは携帯から目を離し目の前の人物を見る。

そこにはアスカと同じような服装で金髪のショートカットで左右
の瞳が蒼と紅のオッドアイの同じクラスである衛宮華鈴えみやかりんがいた。

「やっぱり、セツナちゃんだ」

「カリンちゃん？、こんなところで会うなんて珍しいね。どうした
の？」

「アクアちゃんとアキバ名物のラーメン缶を食べにね」

「アクアちゃん？」

「ああ、ごめん、私の友達で今、桜華学園おうかに通ってるんだ」

「桜華学園って、ものすごいお嬢様学校じゃない？　すごいね桜華
に友達がいるなんて」

「まあね」

カリンはテレながら後頭部をぽりぽりと掻く。

「ねえ、セツナちゃん、こんなところでこんなことを訊くのもなん
だけど……」

「なに？」

カリンは歯切れの悪い口調で切り出す。

「騎士道部に戻ってこない？　騎士長も戻ってきてほしいみたいだ

し……あれはセツナちゃんが悪いわけじゃ……」

「ごめんねカリンちゃん。もう決めたことだから。わたしは武士道
部でアスカと頑張るよ」

「……そっか」

セツナは笑顔でカリンの出戻り説得を遮り断った。カリンの顔は
少し寂しそうだった。セツナは少し心が痛んだ。

「カリーン、お待たせ〜」

二人の沈黙を破ったのは白と黒のゴスロリ服を纏った少女が手を
振ってこっちにやってきた

「あ、アクアちゃんだ。ごめんね、わたし行くよ」

「うん……」

「さっきの話、気にしないでね、じゃあね。また学校で」

「うん、バイバイ」

お互いに笑顔で手を振りカリンは去っていった。

「お〜い、セツナさ〜ん」

「あっ、マナっち、アスカ」

マナの声を聞き振り返る。入れ違いで今度はアスカとマナがセツ
ナの元にやってくる。

「お待たせしました」

「ちよっと、セツナ。あんたまた迷ったの？」

「えへへ〜」

二者二様の開口にセツナは笑って返す。

「じゃあ、さっそくMNP予約番号をゲットしに行きますか」

マナの先導に二人は頷いた。

三人はまず、利用しているキャリアが同じなのでアキバのダケモ
ショップでMNP予約番号を取得し満を持してアキバエドバシへ。
前日の相談の結果、乗り換えるキャリアはミストバンクにすること

に決めていた。最大の決め手は基本使用料の安さと同じミストバンク携帯同士なら時間帯制限があるものの通話料無料ということだった。

エドバシー一階携帯コーナーは土曜日ということもありそれなりの人ごみがあった。三人は携帯コーナーのミストバンクコーナーへ赴き携帯選びをそれぞれ開始した。

セツナは当初の予定通りこなたケータイことアイオクケータイに決める。アスカはある程度便利機能があるスリムケータイをチョイスした。

「……マナっち……まだ決まらないの」

「もう少し待ってください」

「一時間半くらい迷ってんじゃない」

「もう少し待ってください」

呆れ声の二者二様の質問にマナは同じ返答で答える。

「これにしよう」と

長い時間悩んだ結果、マナはスライドワンセグケータイを選んだ。そして、三人は機種変の為に店員さんに声をかける。さすがに一人で三人は対応できないので店員さんは応援を呼んだそれぞれ一人ずつ店員さんが付き、自分たちがMNP希望と告げるとキャンペーンの説明が始まる。説明を受けるとするとカウンターへ案内され書類を書きMNP予約番号が書かれた紙を渡す。

「では、携帯お渡し時間は、そうですねー約一時間半くらいですがよろしいですか？」と言われセツナは『長いな』と思いながらも素直に『大丈夫ですよ』と、いい領いた。

「お待たせ」

「何時間待ちだった？」

「わたしは一時間半だった」

「わたしも。みんな同じくらいかな？」

アスカとセツナはそう会話しながらマナを待つ。

「お待たせしましたあゝ」

軽快な声と共に数十分の時を経てマナが帰還する。

「マナっちは何時間待ち？」

「一時間半くらいです」

「みんな同じだね」とセツナが言うと「そだね」とアスカが返す。

こゝして一時間半の暇つぶしにと三人はゲームセンターへと向かう。一階から三階までがゲームセンターで地下が同人ショップという変わった構成の建物へと足を踏み入れエスカレーターで二階へと向かった。

二階はパズル・シューティングゲーム・大型カードゲームフロア。アスカはシューティングゲームをプレイしマナは三階で対戦格闘ゲームをプレイするためにエスカレーターに乗り三階へ。



「うわ、なにこれ？ 弾すごくない？」

アスカがプレイしたのは『怒首パッチ大往生』という弾幕系シューティングゲームである。普通のシューティングゲームと何が違うかというと画面を覆いつくすほどの弾数だ。

「最近じゃ大体のシューティングは弾幕系よ」

マナにしゃべりながらもアスカは画面を覆う弾幕の間を縫うように避けていく。

「へえゝ うまいね」

「まあね、セツナもやる？ 意外と動体視力鍛えられるよ？」
「ほんと？」

そういうとセツナはアスカの隣に座り硬貨を一枚投入口に投入。プッシュスタートボタンを押し機体を選択し弾幕が飛び交うアスカが待つ戦場へと降り立つ。

数十分後。アスカは第四ステージでゲームオーバーになり席を立

つ。ちなみにセツナは弾が避けきれずわずか一分でゲームオーバーとなっていた。



「落ちろ！」

「直撃！ くっ、まだだ！ まだ終わらんよ！」

ゲームセンター三階ではマナはアップライト型筐体でのゲームである宇宙世紀で活躍するロボットの対戦ゲームプレイしていた。念のため言っておくがもちろん実際に叫んでいるのではなく心の中で叫んでいる。

マナの使用機体は金色のMSである『百七式』で対戦相手の髪が真っ赤な少年はその髪の色と同様の真っ赤な機体の『リック・デロス』だった。直撃された百七式はダッシュしリック・デロスから距離を離しバルカン砲で威嚇射撃をし、ビルの後ろの隠れる

「機体のダメージが大きい……これでは機体がもたん！」

「見つけたぞ！ 金色！」

「見つかっただと！ ええい！」

百七式はすんでのところでビーム射撃をかわし、ビームライフルでの反撃をする。

「迂闊だな！」

空中に飛び上がりそのままエアダッシュで百七式へと追撃をかけた。射撃の硬直で動けない百七式はリック・デロスのビームサーベルの攻撃をまともに受け後方にふっ飛んだ。

「まだ！ たかがメインカメラがやられただけだ！」

このゲームにメインカメラという概念はないのだが機体が動くのでそう叫んでいた。もちろん心の中で。

「もらった！」

ととめとばかりにリック・デロスが百七式にダッシュで近づく。「当たらなければ、どうと言う事はない！」

百七式は青色のオーラをまとい高速で回り込みダッシュをかけリック・デイロスの背後に回った。

「なんだと！」

「うおおおおおおおおお！」

百七式のビームサーベル攻撃が連撃コンビネーションでリック・デイロスに直撃。

「な、なぜだ！ う、うわあああああ！」

機体が真っ二つになり爆音と共にリック・デイロスが煙をあげ爆発する。

「それは、坊やだからさ」

自販機で買ったアルミ缶の緑茶を一口飲みながら言う。何度も言うが心の中で、である。そして、これはゲームである。実際には対戦相手の赤い髪の男の子は何食わぬ顔をして立ち去っていった。

その後マナは二階に降りてセツナとアスカと合流し三人はUFOキャッチャーやパズルゲームをプレイし時間を潰した。

「アスカ、そろそろ戻ろっか？」

「ん、そうだね」

セツナが腕時計を見て促す。それに習い二人も携帯の時計の時計を見て確認する。

「では、エドバシに戻りますか」

マナを先頭にして三人はゲームセンターを後にしたのだった。

「こちらがお客様の機種変更された携帯電話でよろしいでしょうか？」

ミストバンク携帯受け取りカウンターで女性店員さんが実物のこなたケータイ見せてセツナに確認してもらい「そうです」と頷く。

「はい、アドレス帳は前の携帯から引き継いでいるので改めて入力する必要はありません。あと、お客様はMNPでの機種変なので電

話番号の変更はございません。ですが、メールアドレスだけは引継ぎできません。当店で新メールアドレスをアドレス帳に登録されているメールアドレスに一斉に告知できるサービスを実施中ですがご利用いただけますか？」

と、いう店員さんの問いかけにセツナは『いえ、結構です』と伝えた。

「かしこまりました。では、事務契約手数料ですがこちらは初回の請求時での請求となりますので今回はお支払う必要はございません。以上で説明は終了致しますが質問等がありますか？」

セツナは「いえ大丈夫です」と答える。

「はい、ではこちらの携帯はすでに使える状態となっております。すぐに携帯はお使いになりますか？」

「えっ？ もう使えるんですか？」

思わず聞き返す。すると女性店員さんは「はい、すでに契約は完了しているのでお使いになれます」と答えた。

「じゃあ、使います」

「では、どうぞ」

新しい携帯を受け取りセツナはうつとりと眺めてしまった。

「お客様、今回は携帯電話本体の金額のみとなります。お客様は割引適用条件を満たしているので、一万六千円となります」

「えっ？ あ、はい」

軽快にレジを叩き金額表示ウインドウに金額が打ち込まれる我に返ったセツナは一万六千円ちょうどを出し払う。

「ポイントカードをお持ちですか？」

「あ、いえ持っていないません」

「お作り致しますか？」

「えっと、今回はいいです」

「かしこまりました。では、一万六千円ちょうどお預かりいたします」

ポイントカードの作成を断りやっとお金を受け取ってくれた女性

店員は慣れた手つきでレジを打ちレシートを引き出す。

「では、レシートのお返しとなります」

レシートを受け取り次に前の携帯と新しい携帯の箱が入った紙袋を受け取る。

「ありがとうございます」

笑顔で見送られセツナは携帯を開きながら歩き出す。

「おかえり」

「セツナさん、新しいケータイはどうですか？」

アスカとマナも新しいケータイをいじりセツナを迎える。

「なんか……すごい感動！」

セツナはケータイ画面を横縦、横縦にしながら感動している。

「さてと、このあとどうしよっか？」

「お昼ごはんを食べませんか？ エドバシの八階に食堂街があるらしいですよ？」

「どうする？ セツナ」

「うん、いいんじゃない？」

ケータイをいじり上の空で返答する。

「……ダメだ、夢中になってるよ」

「まあ、いいじゃないですか。五年ぶりの新しいケータイだったら夢中になりますよ」

「そうかな？ 夢中になりすぎじゃないの？」

「まあまあ、セツナさん行きますよ」

マナがセツナの腕を引っ張りその勢いでアスカの腕を開いている左手で掴む

「ちょっ！」

「さあ、ごはんを食べましょう。実はお腹ぺこぺこで歩けないんですよ」

「歩いてるじゃん！ 力強く踏み出してんじゃん！ なんか力強く腕掴んでんじゃん！」

と、言うアスカのツツコミを無視しマナは二人を引き連れエレベーターへと向かうのだった。

セツナは終始ケータイをいじっていたのは言うまでもないことだった。

オマケ／学園セツナちゃん・MNP開始記念版・完

第二夜 主に仕える者たち（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。間宮冬弥です。これにて『聖夜幻想物語』は最終回です。どうでしょうか？ 面白かったですか？ オマケはMNPで何か書いてみたいと思います。面白かったが、途中かなりおかしいことになってしまいました。反省です。では、反省しつつこの辺で失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5751c/>

聖夜幻想物語

2010年10月8日15時32分発行